柏原市文化財概報　1983—Ⅵ

太平寺・安堂遺跡

1983年度

1984年

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市域では、平野部の開発が限界に近づいてきたため、丘陵、山地斜面へと開発の手がのびています。それは、大阪の衛星都市として発展する柏原市にとっては、やむを得ない面もあると言えるでしょう。

今回調査を実施した太平寺・安堂遺跡では、斜面から7世紀頃の住居跡が発見されました。古代の人々も、現代と同様に、宅地難から山地斜面に住居を営んだのでしょうか。しかし、山地斜面に建てられた住居は、長く続くことなく、約100年で廃絶され、山林に戻ったようです。それが、本来の姿だったのでしょう。その後、見晴らしのよいその地に、墓が数基築かれています。山を聖なる地と考え、そこに死後のやすらぎの場を求めたためでしょう。それからは、人が住むこともなく、埋もれていた古代の人々の住居跡や墓が、今日、開発によって消されてしまうのです。

私たちは、そこに、むなしさにも似た感情を覚えます。聖なる地として考えられていた山が、エンジン音をうならせる機械によって、見る見る間に、削平されていく。古代の人々の思いを断ち切るかのように。

古代の人々の生活跡を破壊する行為は、現代の人々の生活環境を破壊する行為にも通じます。やむを得ないとは言え、生活環境を破壊する開発は極力避け、快適な生活を営める開発を期待したいものです。

昭和59年

柏原市教育委員会

例　言

1．本書は、柏原市教育委員会が、仮称柏原市立第二体育館建設予定地で実施した柏原市安堂町所在、太平寺・安堂遺跡および太平寺古墳群の緊急発掘調査概報である。

2．発掘調査は、太平寺・安堂遺跡1983―４次調査とし、1983年12月１日から1984年２月28日まで実施した。調査に要した諸費用は、柏原市土地開発公社の負担によるものである。

3．発掘調査は、柏原市教育委員会・社会教育課　安村俊史が担当した。

4．遺物・図面等の整理は安村が担当し、松田光代の協力を得た。

5．本書の編集および執筆は、全文、安村が担当した。

6、本書で使用した方位は、すべて磁北である。

7．調査・整理に際しての協力者は下記の通りである。

石田　博	竹下　賢	北野　重	桑野一幸
花田勝広	広岡　勉	大塚淳子	石田成年
伊藤泰臣	伊藤芳匡	井宮好彦	上條裕典
佐藤　尚	服部　雅	丸本周生	山中　茂
中田ゆかり	藤岡弘子	藤本直美	松村富子
森下尚美	坂本道子	乃一敏恵	松成早苗
横関勢津子	吉居豊子		

本　文　目　次

第一章　調査の概要……1
第二章　調査成果
１．遺構
①柵……4
②建物……8
③土壙……17
④溝……18
⑤炉……19
⑥古墓……20
２．遺物
①土器……26
②埴輪……35
③土製品……37
④屋瓦……37
⑤鉄製品……37
⑥鉄滓……40
⑦銅滓……40
第三章　まとめ……41

挿　図　目　次

図１　調査地位置図……2
図２　調査前地形図・調査地全体図……3
図３　柵―１遺構図……4
図４　Ⅰ・Ⅱ区遺構図……5
図５　柵―２遺構図……7
図６　建物―１遺構図……8
図７　建物―２遺構図……9
図８　建物―３遺構図……12
図９　建物―４遺構図……13
図10　建物―５遺構図……14
図11　建物―６遺構図……15
図12　建物―７遺構図……16
図13　Ⅱ区西端遺構図……17
図14　Ⅱ区東端上層遺構図……18
図15　Ⅱ区西端上層遺構図……19
図16　古墓―１遺構図……20
図17　古墓―１出土蔵骨器・土器……21
図18　古墓―１出土鉄釘……22
図19　古墓―１出土ガラス玉……22
図20　古墳―２遺構図……23
図21　古墓―３遺構図……24
図22　古墓―３出土鉄釘・鉄滓……24
図23　古墓―４遺構図……25
図24　古墓―２～４出土銅銭……25
図25　Ⅲ区東壁土層図……26
図26　ピット出土土器……26
図27　土壙出土土器……27
図28　溝―４出土須恵器・埴輪……28
図29　溝―３・７出土土器……29
図30　溝―５上層出土土器……29
図31　溝―５下層出土土器……30
図32　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土須恵器……32
図33　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土土師器……33
図34　Ⅲ区包含層出土土器……34
図35　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土埴輪……35
図36　Ⅲ区包含層出土埴輪……36
図37　包含層出土土製品……37
図38　屋瓦……38
図39　土壙出土鉄製品……38
図40　鉄製品……39

図　版　目　次

図版１　Ⅰ区
図版２　Ⅱ・Ⅲ区
図版３　建物―１周辺
図版４　溝―４
図版５　古墓―１
図版６　古墓―１
図版７　古墓―２・４
図版８　古墓―３
図版９　古墓―１・３出土遺物
図版10　遺構内出土遺物
図版11　遺構内出土遺物
図版12　包含層出土土器
図版13　包含層出土土器
図版14　包含層出土土器、屋瓦、鉄製品
図版15　形象埴輪
図版16　土製品・鉄滓
図版17　鉄製品

第一章　調査の概要

本調査は、柏原市土地開発公社による仮称柏原市立第二体育館建設に先立つ緊急事前発掘調査として、計画、実施されたものである。調査地は、柏原市安堂町989―１、990、991―１、992、994―１、995―１に所在し、太平寺・安堂遺跡、および太平寺古墳群の範囲内である。今回の調査では、古墳に伴う遺物・遺構も発見されているが、住居跡としての性格を重視し、太平寺・安堂遺跡の名称を採用する。調査は、1983年12月１日から実施し、1984年２月28日に終了した。なお、調査に要した諸費用は、柏原市土地開発公社の負担によるものである。

調査は、調査対象地の西側の体育館建設予定地の北半をⅠ区、南半をⅡ区とし、調査対象地の南東部分、三角形状の駐車場建設予定地をⅢ区と設定して実施した。調査着手前は、全域を一度に発掘する予定であったが、発掘による排土の運搬等に多額の費用がかかること、地元住民への影響を考え、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区の順に発掘し、それに伴う排土は他区へ積み上げることにした。そのため、調査地全域の写真撮影が不可能となるなど、多少の困難が生じた。

現状の地形測量等の後、Ⅰ区の調査に着手し、12月30日に終了。続いて１月５日よりⅡ区の調査に着手、２月８日よりⅢ区の調査に着手し、２月28日に調査を完了した。また、遺物、図面等の整理は、調査と共に着手し、５月末日に完了した。

調査地は、生駒山地から派生する小規模な尾根の南西麓にあたり、調査地北端付近が稜線となる。過去には、今回の調査地東側で数回の調査が実施されており、30基以上の古墳からなる太平寺古墳群の存在が知られている。[註] 太平寺古墳群は、木棺直葬墳と横穴式石室墳がみられ、豊富な埴輪の出土が注目される。おそらく、６世紀代全般にわたって築造されたものであろう。今回の調査では、古墳は確認できなかったものの、墓道と考えられる溝状遺構、埴輪などが発見されている。

調査地西側の平地部には、知識寺、家原寺の寺院跡が存在し、今回の調査で出土した７世紀代の遺構・遺物は、それらの寺院と何らかの関係を有するものと考えられる。

調査地付近は、生駒山地を形成する花崗岩の岩盤、もしくは、その風化した媒乱土が地山となる。調査地も部分的に岩盤の露頭が見られ、包含層は薄く、遺構・遺物の残存状態は、良好とは言えないが、貴重な成果をあげることができた。

調査中に、遺構保存のため、用地変更、設計変更を求めたが、不可能との返答があり、破壊するのやむきに至った。残念ではあるが、それ故、記録保存を充実させるべく努力した。

註

大阪府教育委員会『太平寺古墳群』1980

柏原市教育委員会『太平寺古墳群』1983

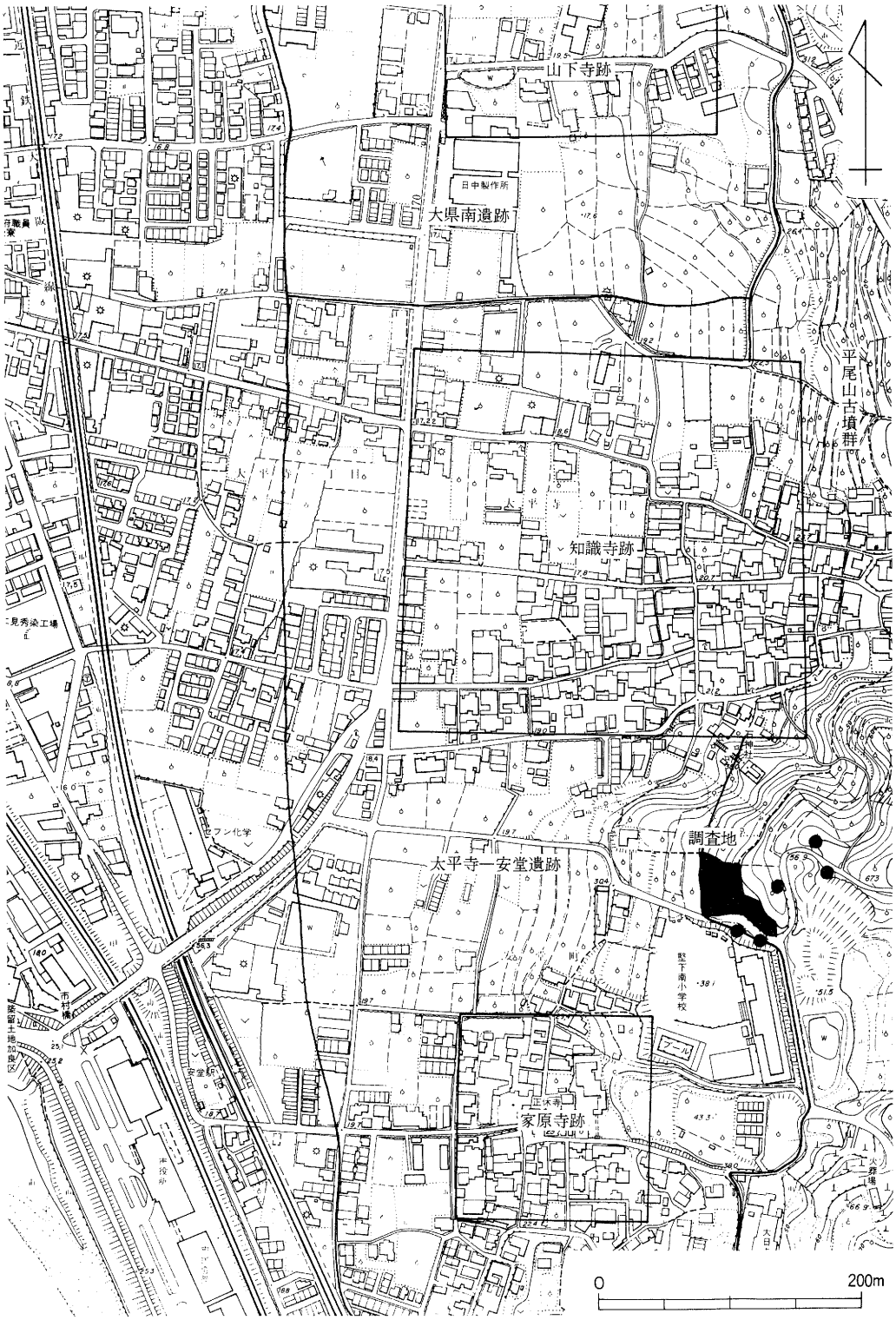
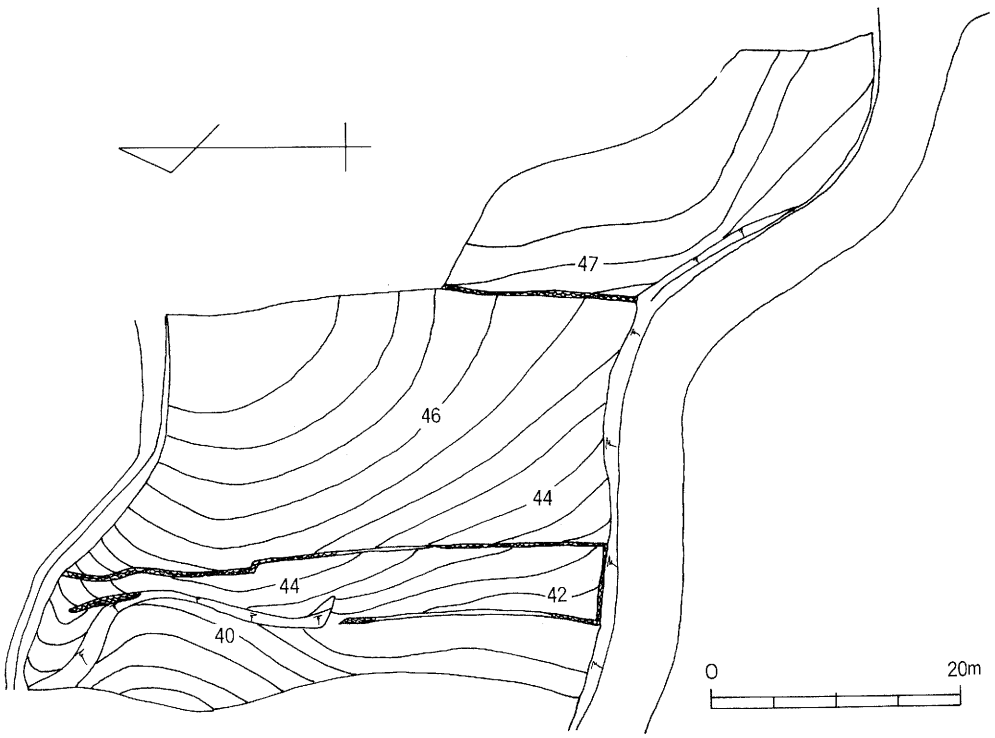


図1　調査地位置図



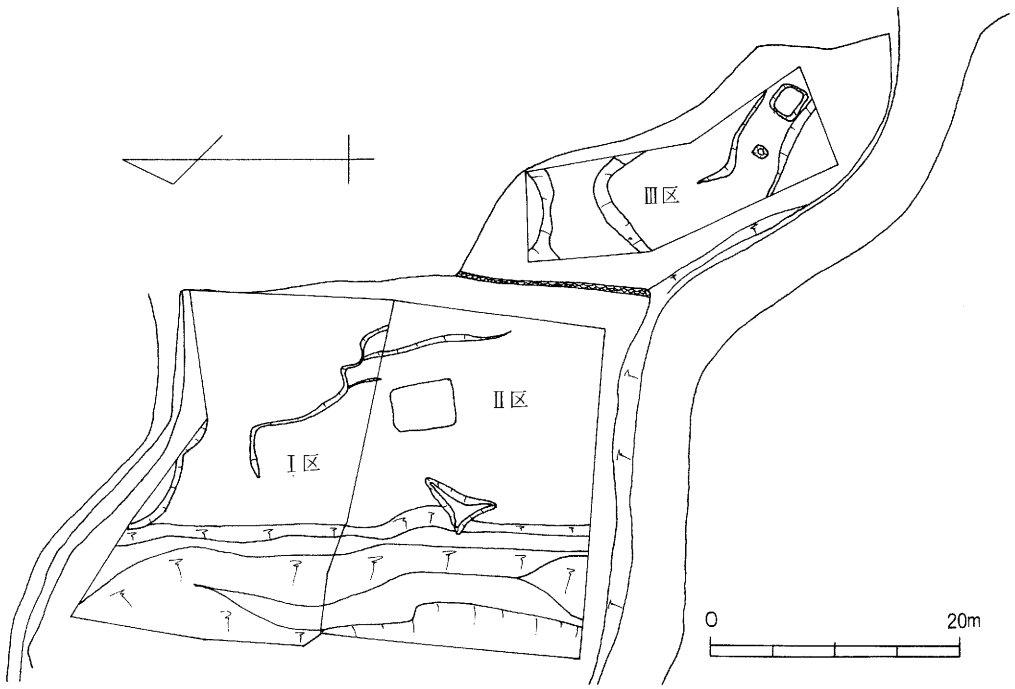


図２　調査前地形図・調査地全体図

第２章　調査成果

１．遺構

地山は、花崗岩の岩盤、もしくはその風化した媒乱土からなり、現地表面からの深度は、平均50cm前後である。標高は、地山面でT.P.38.1～48.6m である。地山は東側で２～３段の階段状をなし、遺構はこの段上に集中する。中央やや西よりで地山は急傾斜面となり、斜面下にも遺構が認められる。

①柵

ピットは調査地全体で172個検出されており、柵２、掘立柱建物６棟以上が確認された。また、柵、建物に対応する以外のピットも、大部分は建物に伴うものと考えられ、実際には、３～４時期にわたり、合計十数棟の建物が存在したと考えられる。なお、ピット番号は、煩雑になることを避けるため、柵・建物を構成するピット、および実測図を掲載した遺物を出土したピットのみに使用した。・

柵―１は、ピット―１～４が南北に直線に並び、軸はＮ―1°―Ｗである。後述すゆ建物―２との間に、約60cmの段差があり、対応するピットが見られないことから、柵列と考えられる。各ピットはほぼ同大であり、90cm四方である。ピット間の距離は約 210 cmで、更に北へのびていたとも考えられる。ピットの残存状態は悪く、深さは12～24cmにすぎない。

ピット―２から須恵器杯蓋(22)、土師器杯(23)が出土しているが、両者にやや時期差が認められ、柵―１の時期は、これだけでは決め難い。

柵―１の南東に、ピット―12～14が直線に並び、これらは建物に伴うものと考えられるが、残存状態が悪く、対応するピットは検出できなかった。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

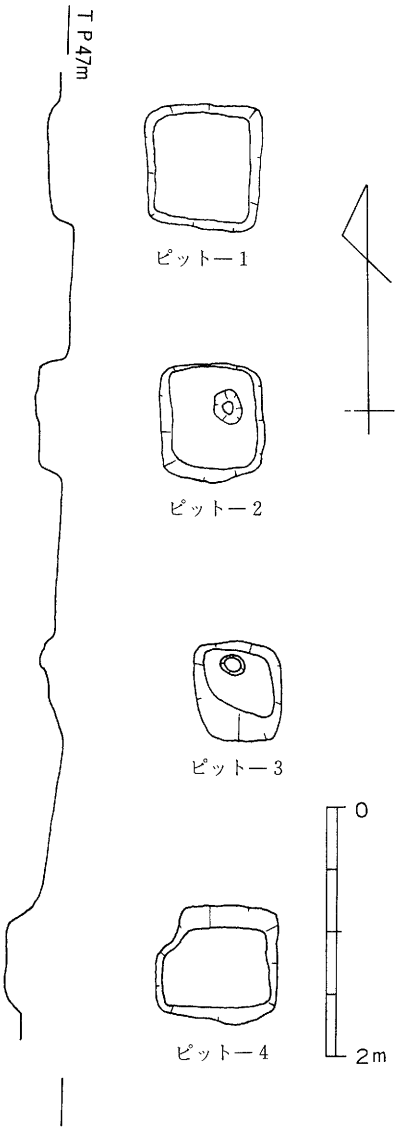


図３　柵―１遺構図

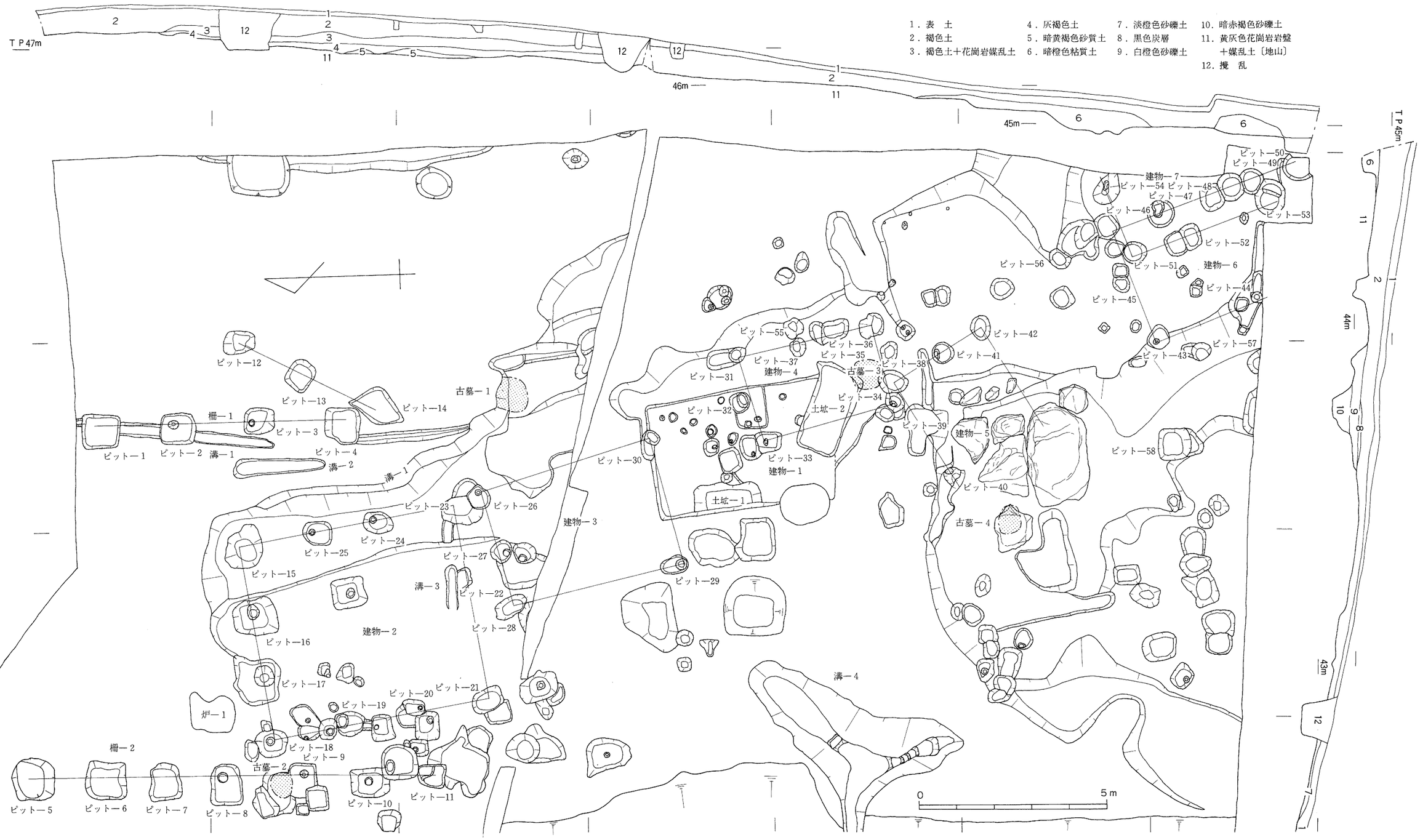

1．表　土
2．褐色土
3．褐色土＋花崗岩媒乱土
4．灰褐色土
5．暗黄褐色砂質土
6．暗橙色粘質土
7．淡橙色砂礫土
8．黒色炭層
9．白橙色砂礫土
10．暗赤褐色砂礫土
11．黄灰色花崗岩岩盤＋媒乱土〔地山〕
12．攪　乱
TP47m
46m
45m
TP45m
44m
43m
ピット—1
ピット—2
ピット—3
ピット—4
ピット—5
ピット—6
ピット—7
ピット—8
ピット—9
ピット—10
ピット—11
ピット—12
ピット—13
ピット—14
ピット—15
ピット—16
ピット—17
ピット—18
ピット—19
ピット—20
ピット—21
ピット—22
ピット—23
ピット—24
ピット—25
ピット—26
ピット—27
ピット—28
ピット—29
ピット—30
ピット—31
ピット—32
ピット—33
ピット—34
ピット—35
ピット—36
ピット—37
ピット—38
ピット—39
ピット—40
ピット—41
ピット—42
ピット—43
ピット—44
ピット—45
ピット—46
ピット—47
ピット—48
ピット—49
ピット—50
ピット—51
ピット—52
ピット—53
ピット—54
ピット—55
ピット—56
ピット—57
ピット—58
柵—1
柵—2
溝—1
溝—2
溝—3
溝—4
古墓—1
古墓—2
古墓—3
古墓—4
建物—1
建物—2
建物—3
建物—4
建物—5
建物—6
建物—7
土坑—1
土坑—2
炉—1
0
5m

図4　Ⅰ・Ⅱ区遺構図

柵―２は、ピット―５～11が南北に並び、軸はN―2.5°―Eである。各ピットは、掘方の形、大きさなどが若干異なるが、平均すると、ほぼ90cm四方の方形となる。ピット―８～10では柱穴が確認できたが、他のピットでは不明であった。ピット―８～10をもとに、柱の径を復元すると、15～20cmとなる。ピット―８・９間は、2.16m、ピット―９・10間は1.76mと異なり、各柱は等間隔に建っていないようである。各ピット間の距離は、平均1.8mとなる。各ピットは、比較的良好に遺存しており、最も深いピット―８は、76cmを測る。

柵―２に伴う遺物は少なく、時期を示すものも、柵―１のピット―２から出土した須恵器杯蓋(22)とほぼ同様の細片が出土したのみである。柵―２の西側は崖面となり、崖上に柵がめぐらされており、柵―１と同様に、等高線に平行するように築かれている。柵―１・２は、ほぼ平行し、掘方の大きさがほぼ等しいことから、同時期に、同じ目的で築かれたと考えられる。いずれもテラス状の落ち際に築かれていることを考えると、風防、あるいは建物を画するためではないだろうか。このように考えた場合、柵ではなく、塀のような施設であった可能性もある。掘方が、単なる柵と考えるには非常に大きいことも、その可能性を示唆しているようである。

柵―１・２の間には、地山を削平して、平らにした後に、建物―２が建てられている。柵―１の東側には建物を確認できなかったが、やはり、地山を削平した痕跡が認められ、建物が存在したものと考えられる。

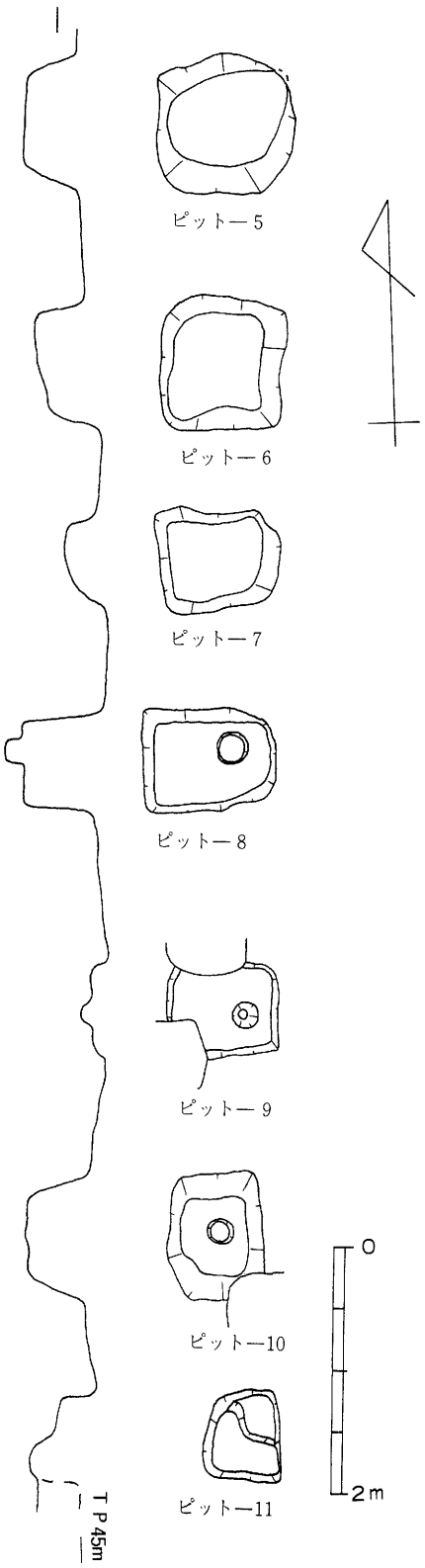


図５　柵―２遺構図

②建物

建物は、竪穴式住居と考えられるもの１棟、掘立柱建物を６棟確認できた。

建物－１（図版３）

建物－１は、唯一、竪穴式住居と考えられる遺構である。主軸は、N－7.5°－Wを示し、南北に長い長方形平面を呈する。長辺約４.８ｍ、短辺約3.2m を測り、深さは約40cmである。床面はT.P.44.95m で、ほぼ平坦面をなす。また、床面には厚さ数mm程度に、明黄褐色粘土を全面に貼り付けてある。この粘土は、大阪層群の粘土層と同質と考えられ、調査地付近で採取したものと思われる。竪穴住居内に、ピットが、小ピットも含めて18個確認されたが、大部分のピットは、竪穴住居より新しいと考えられる。竪穴住居検出時に、慎重に上面を精査したが、埋土が酷似し、これらのピットを確認することはできず、竪穴住居床面で検出したものである。しかし、それらはいずれも、床面の粘土を掘り込んでおり、竪穴住居に伴うものか、もしくは後出するものである。そして、その配置から考えると、竪穴住居に伴うものとは考え難いのである。このように、竪穴住居に伴うと考えられるピットは明確にできなかった。

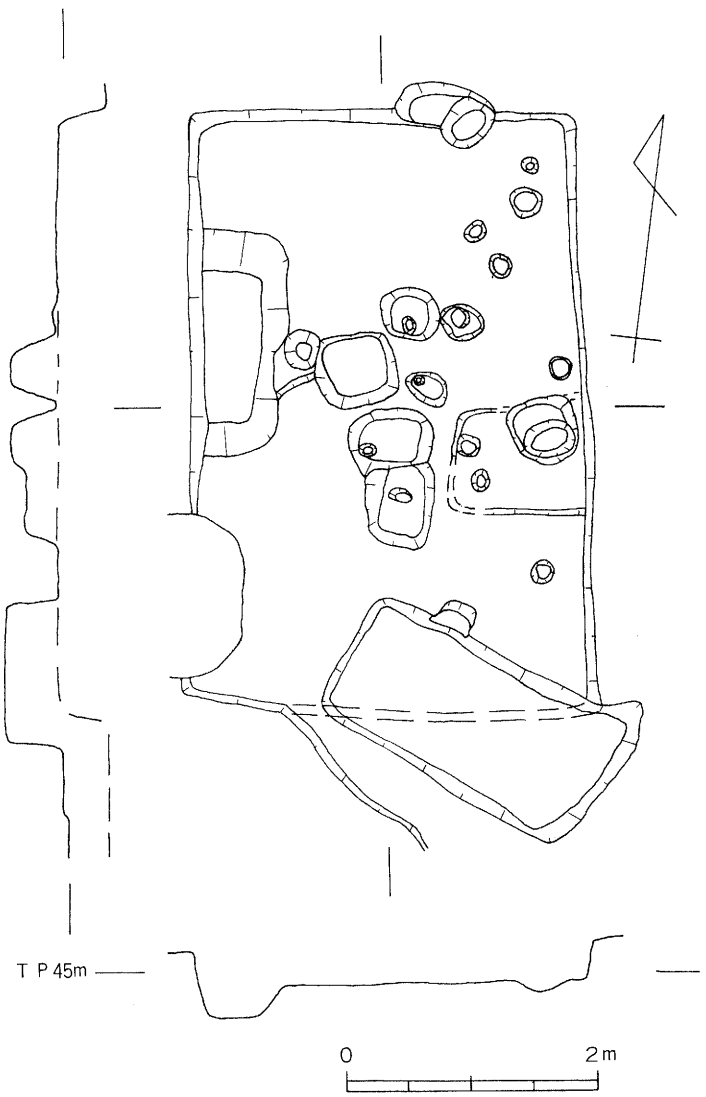


図６　建物－１遺構図

竪穴住居の東辺中央に、方形に浅く凹んだ遺構がみられる。そこには、焼土・炭などが少量ではあるが、盛り上がるように残っており、竈の位置を

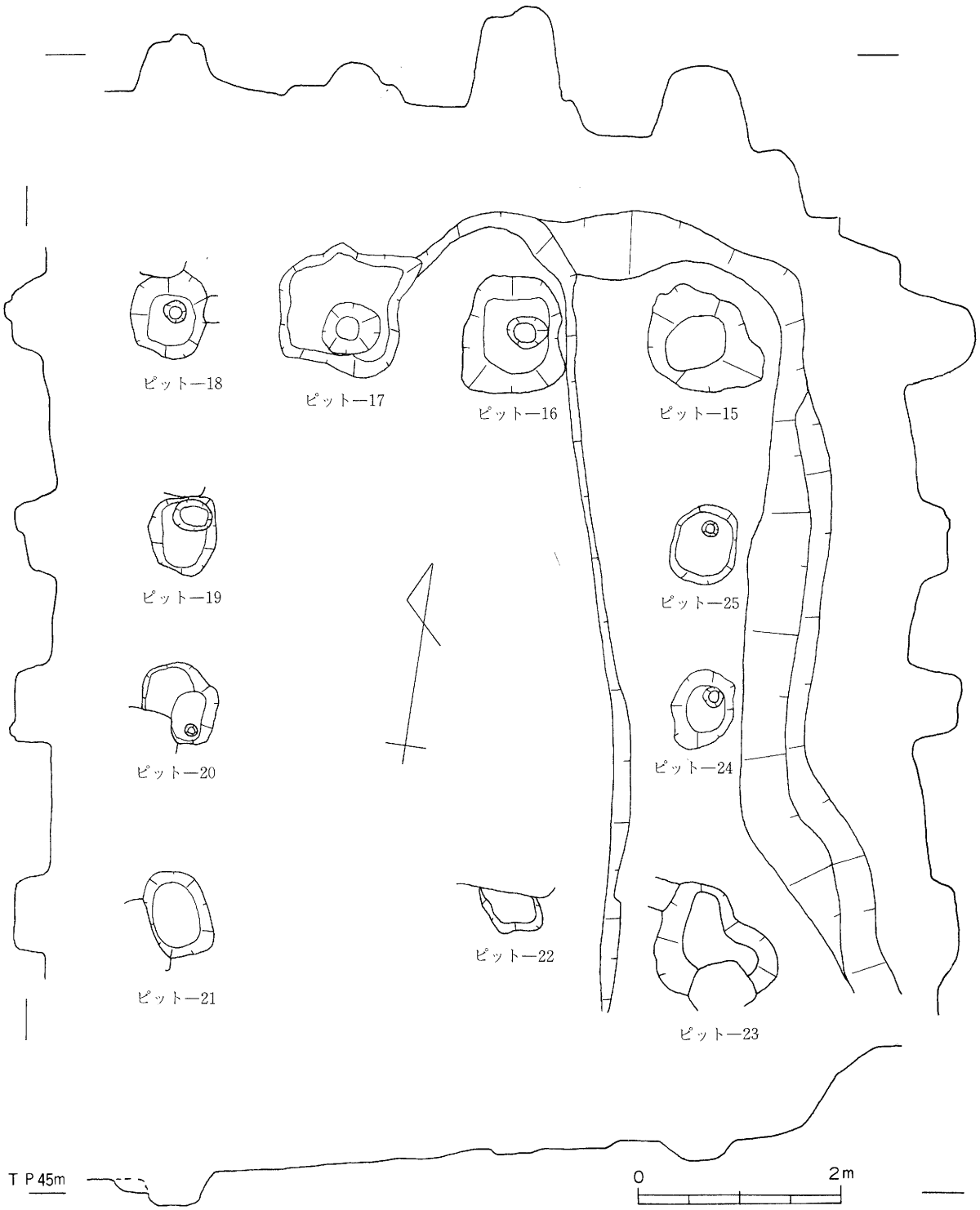

ピット—18
ピット—17
ピット—16
ピット—15
ピット—19
ピット—25
ピット—20
ピット—24
ピット—22
ピット—21
ピット—23
T P 45m
0
2m

図7　建物—2遺構図

示すものと思える。

遺物は、須恵器杯蓋(24)のみ図化できたが、破片が多く、6世紀後葉から7世紀後葉にかけての土器が出土している。(24)などは、後の整地の際に混入したものと考え、6世紀後葉頃の竪穴住居ではないかと考える。

建物—2（図版1）

建物—2は、ピット15～25によって構成される3間×3間の建物である。主軸はN—8.5°—Wを示す。ピット—24の柱穴の位置がややずれているが、桁行は、ほぼ2m間隔の6m。梁行は、1.7m間隔の5.1mである。実際には、ピット—21と22の間に、もう一箇所ピットがあったはずであるが、削平されているようである。他のピットの残存状態が良好であるにもかかわらず、ピット—22も痕跡を留めるにすぎない。しかし、対応するピットが無いことから更に南へ建物が続いていた可能性は少ない。地形から考えると、南に入口があったと想定され、これと関係があるのかもしれない。

掘形は大きさ、形とも差が激しいが、ほぼ70cm～100cmで、桁行方向に長い方形を呈する。深さも大きく異なるが、平均T.P.44.8mを底とする。

建物—2の東辺、北辺では地山が段状をなす。これは、建物—2の建築に際して、地山が削平されたためと考えられる。おそらく、削平した土量は、20㎥を越えるであろう。

建物—3

建物—3は、ピット—26～30によって構成される。桁行は、4.6mを測り、その間にピットは認められなかったが、おそらく、一個もしくは二個ずつ存在したと考えられる。梁行は、3.2mを測り、ピット—27に対応するピットは削平を受け、認められない。

建物主軸は、N—14°—Wである。各ピットは整然と並ばないため、建物とすることにやや疑問も残るが、ピット—28・29・30がいずれも、長楕円形を呈することや、埋土も一致することから建物と考えてよいであろう。

ピット—26・27は径約60cmの円形であり、ピット—28～30は、長径約80cm、短径約50cmの長楕円形を呈する。ピット—27は、深さ24cmにすぎないが、他は50cm前後である。四隅以外のピットは非常に浅かったのであろう。

各ピットは、いずれも褐色粘質土を埋土にし、ピット—26から須恵器杯蓋(25)が出土しており、ピット—27からも、同様の破片が出土している。また、ピット—28から、土師器の竈の破片が出土している。これらの土器から、建物—3の時期は6世紀末葉前後と考えられる。また、ピット—30は、建物—1の北壁と切り合っており、柱穴は建物—1の床面粘土を掘り込んでいることから、建物—1より新しいと判断できる。更に、ピットの新旧は明確にできなかったが、建物—2と同時存在することはありえない。

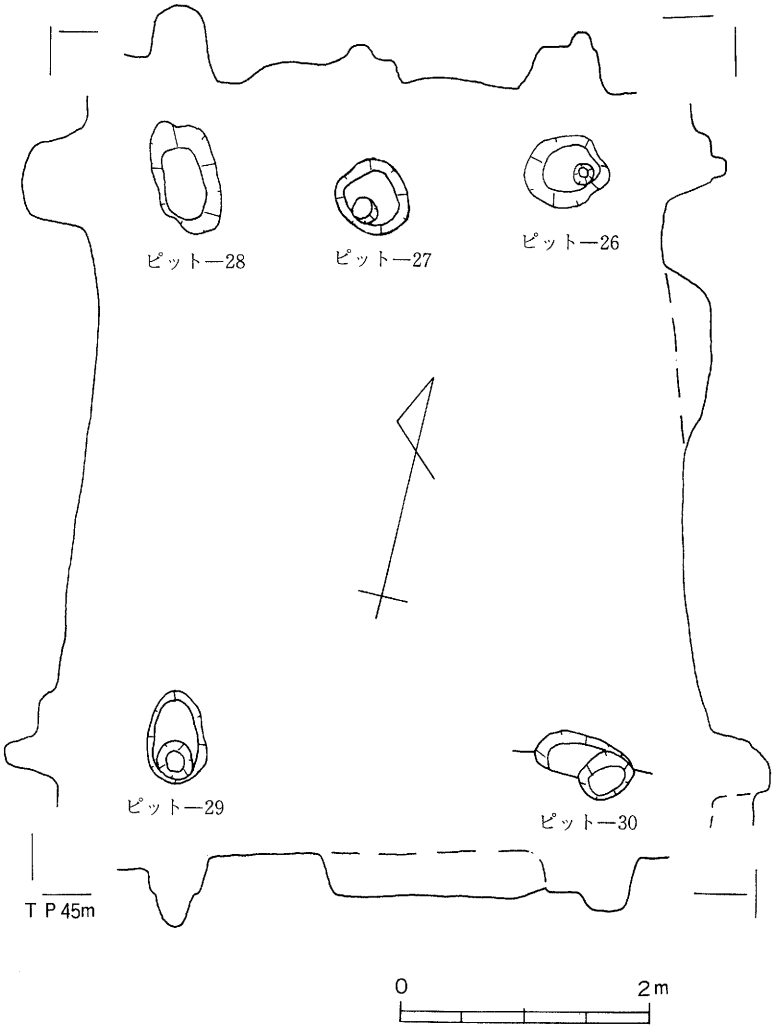


図 8　建物— 3 遺構図

建物— 4

建物— 4 は、ピット—31～37によって構成される 2 間× 2 間の掘立柱建物である。桁行 3.5 m 、梁行 2.3 m を測る。主軸は、N—14°—Wで建物—3に一致する。やはり、ピットの並び方は整然とせ ず、建物とすることに抵抗もある。

ピット—31のみ、長径108cm、短径48cmと長楕円形掘方であるが、これは柱の抜き取りの可能性がある。他のピットは、径50cm前後の円形掘方を呈する。ピット底面の高さは、ピット—32～35がT.P.44.5m 前後と一定であるのに 対して、東辺のピット—31・36・37は、T.P.45m 前後と非常に浅い。これは、地山面が東から西へと傾斜していることと関係があるのかもしれない。

遺物は、ピット—33～35で、少量の須恵器・土師器片が出土しているにすぎないが、ピット

—34から出土した土師器の杯を1点(26)図化できた。7世紀前葉～中葉頃と考えられる。

ピット—32・33が、建物—1の床面粘土を掘り込んでいることから、建物—4が建物—1に後出することは間違いない。

また、建物—3と主軸が一致することも注意されるが、土器を比較すると、建物—4のほうが、若干新しそうである。

建物—4の周辺には、小規模なピットが集中するが、他に建物を想定することは困難である。削平を受けて消滅したピットが多数あるためか、ピットが建物の柱穴以外に利用されたためかは不明であり、これらのピットの性格を明らかにすることは、できなかった。

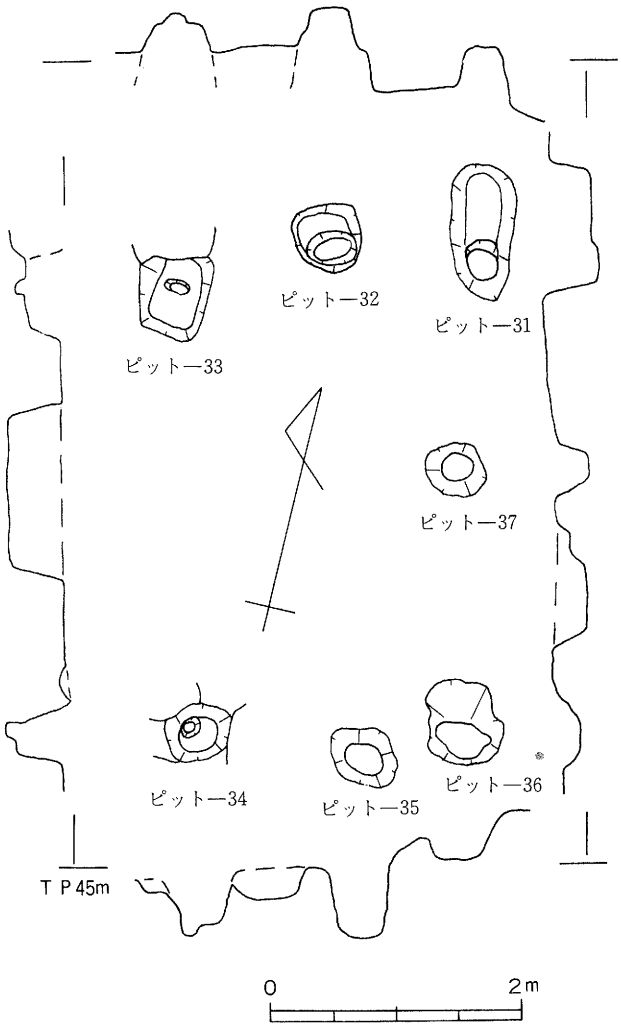


図9　建物—4遺構図

建物—5

建物—5は、ピット38～42からなり、2間×2間以上の掘立柱建物である。建物の南西部分は、方形状の落ち込みに、花崗岩の巨石を埋めたような施設があり、これによって、建物—5の規模は知り得ない。

各ピットは、いずれも1.4m等間隔であり、主軸はN—59°—Eである。掘方は、直径80cm前後のほぼ円形である。ピットの残存状態は悪く、深さ10～40cmを留めるにすぎない。

ピットからの出土遺物は、全く認められず、時期は不明である。

建物—5の南西の施設は、建物群より新しいことが層位的に確認できたが、その時期、性格等は不明である。不用な巨岩を処分するために、穴を掘って落とし込んだものとも考えられる。また、この巨岩が、単なる地山の岩盤とも考えられるが、横穴式石室の石材とも考えることができる。

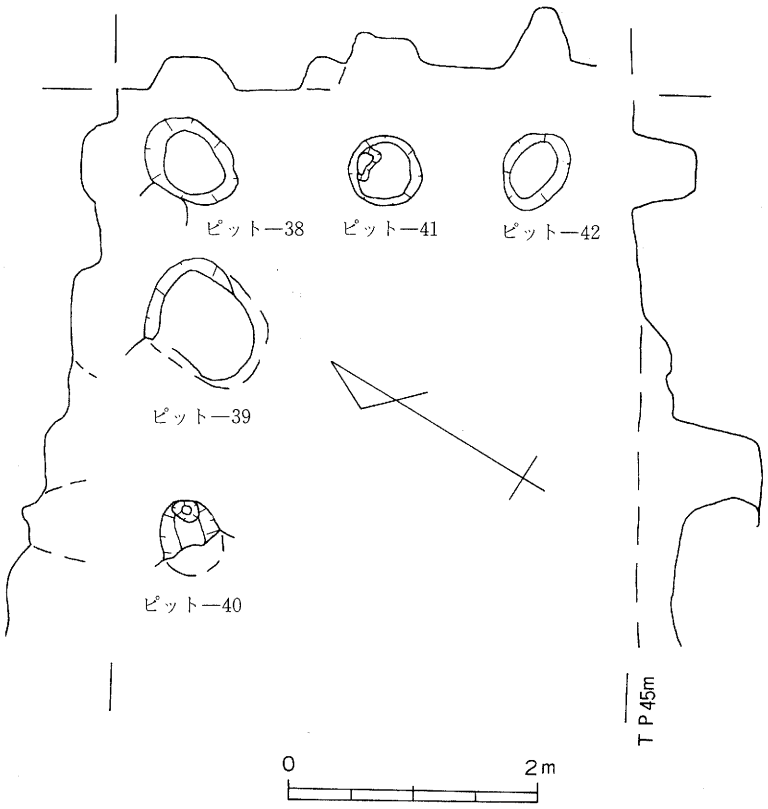


図10　建物—5遺構図

建物—6

建物—6は、ピット—43～50による2間×4間以上の建物である。桁行1.3m等間隔の5.2m以上、梁行1.6m等間隔の3.2mである。建物主軸は、N—20°—Wを示す。

各ピットは直径70cm前後の円形を呈し、深さ10～40cmを測る。その底面はT.P.44.3～44.4mとほぼ一定である。

遺物は、あまり出土しておらず、ピット—46から内面にかえりを有しない須恵器杯蓋の口縁片が出土しており、唯一、時期を示す遺物である。また、鉄釘(171)が一点、やはりピット—46から出土している。

建物—6は、須恵器から、6世紀末葉前後と考えられる。

建物—7

建物—7は、ピット—51～54による1間以上×2間以上の建物である。建物南東部分は、調査範囲外に続いており、その規模は不明である。ピット—51・52間がやや短いが、ピット間の平均距離は1.8m前後である。建物主軸は、建物—6と同様に、N—20°—Wを示す。

各ピットは直径70cm前後の円形を呈し、50～60cmの深さを残す。ピット—54は、約20cmと浅

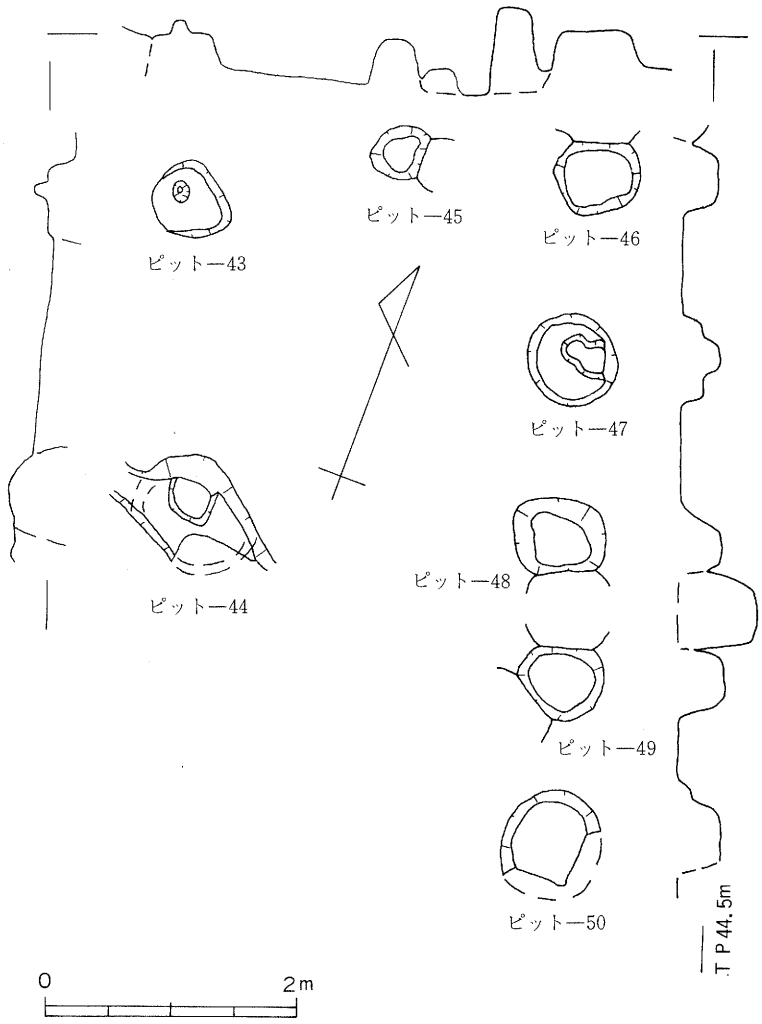


図11　建物—6遺構図

く、底に長さ28cmの自然石が1個置かれていた。

遺物は、ピット—53から須恵器杯身片(27)が出土しており、ピット—51から同様の杯身片、ピット—52から回転ヘラ切り未調整の杯身片が出土している。

建物—7は、建物—6と主軸が一致し、いずれかが建て替えられたものと考えられる。ピットの前後関係は明確にできず、また、建物—6から良好な遺物が出土していないため、遺物から新旧を判断することは困難である。いずれにしても、6世紀末葉から7世紀初頭頃に、短期間に建て替えられたものであろう。建物—6・7周辺には、ほぼ同大のピットがいくつかあり、最低四時期程度の建て替えが考えられる。

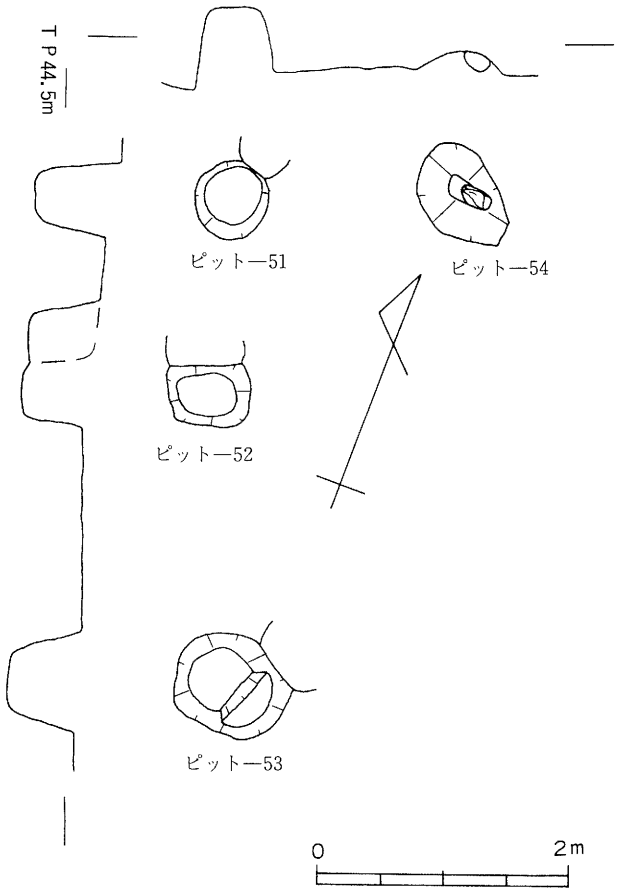


図12　建物—7遺構図

以上のように、時期を明確にできる建物は、あまり存在しない。そこで、建物の主軸、立地なども考慮し、建物群の変遷を検討してみる。

建物—1・2は、ほぼ主軸が一致し、建物—1が竪穴住居であることを合わせ考えると、おそらく、この2棟が建物群の中で最古と思える。また、両者に共通している点は、いずれも、地山を削平し、平らにした後に建物を建築していることである。そして、柵—1・2も、この時期に築かれた可能性が強い。それは、柵—1・2のピットが建物—2のピットに近似することからも推定される。そして、その時期は6世紀後葉頃と考えられる。この時期に、造成とも言うべき工事が行なわれ、建物が建てられたようである。

次に、建物—3と建物—6・8が建てられ、続いて建物—4が建てられている。その時期は、6世紀末葉から7世紀前葉頃であろう。建物—5は、遺物は出土していないものの、ピットの切り合い関係から建物—4より新しいことが明らかである。

ピットから出土している遺物では、ピット—56から出土している須恵器杯蓋(29)が最も新しく、7世紀後葉頃に、建物は廃絶されたものと考えられる。6世紀後葉から7世紀後葉にかけて約100年間、数回の建て替えを行ないながら建物群が営まれていたと考えられるが、建物の規模、ピットの大きさ等は、その間、縮小する方向に向かっていたようである。

建物—6・7の位置から考えると、調査地の南側、現在の道路、および竪下南小学校の敷地内にも、建物群が続いていた可能性がある。しかし、南東部のⅢ区では、建物跡は検出することができなかった。

③土壙

土壙－1

土壙－1は、建物－1と西辺を共通するように掘られている。長さ180㎝、幅78㎝の長方形平面を呈し、深さは約50㎝である。断面は逆台形、底面は平坦である。

土壙－1からは、土師器小皿(33・34)が出土しており、その時期は、13世紀頃ではないかと思われる。他に、同時期の遺構は認められず、遺物も瓦器の細片が出土している程度であり、土壙－1の性格は不明である。

土壙－2

土壙－2は、建物－1の南東部に切り込んで掘られており、長さ232㎝、幅112㎝、深さ44㎝の長方形を呈し、壁面は、ほぼ垂直である。

土壙－2は、建物－1より新しく、古墓－3より古いことが層位的に確認できる。遺物は、土師器の小型壺(35)、内反りの鎌の破片(164)などが出土している。

土壙－3

土壙－3は、建物群の西の崖面下に築かれている。長さ188㎝、幅72㎝、深さ50㎝を測り、ほぼ垂直に掘り込まれた長方形の土壙である。

埋土は褐色土の単一層であり、少量の土器片と共に、刀子の先端(165)が出土している。土器は、時期を知りうるものではない。周囲には建物等の遺構は見られず、斜面に位置する。また、刀子以外に顕著な遺物が認められないことから、土壙墓である可能性が考えられる。軸も、ほぼ南北を指す。しかし、盛土の有無は確認できず、周溝の存在は認められなかった。

同様に、土壙－2も、土壙墓の可能性が考えられる。

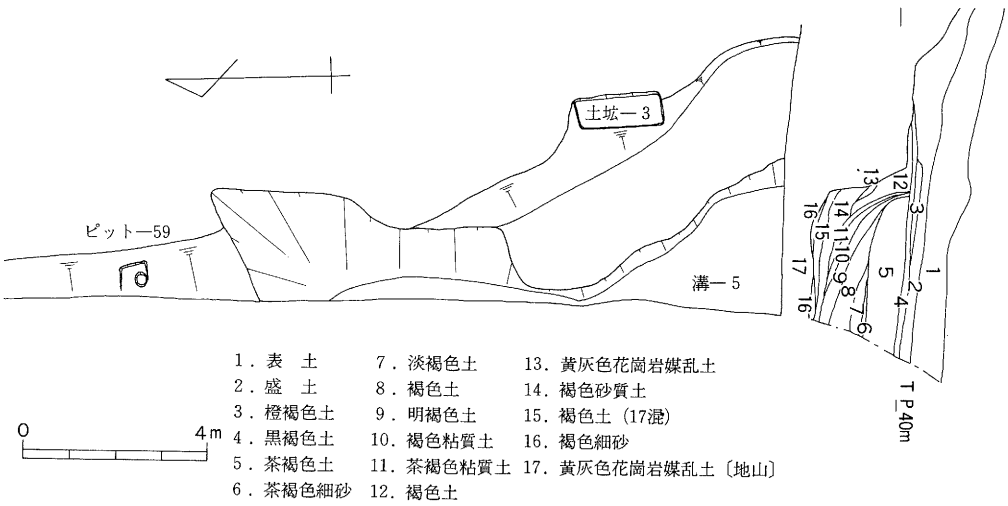


図13　Ⅱ区西端遺構図

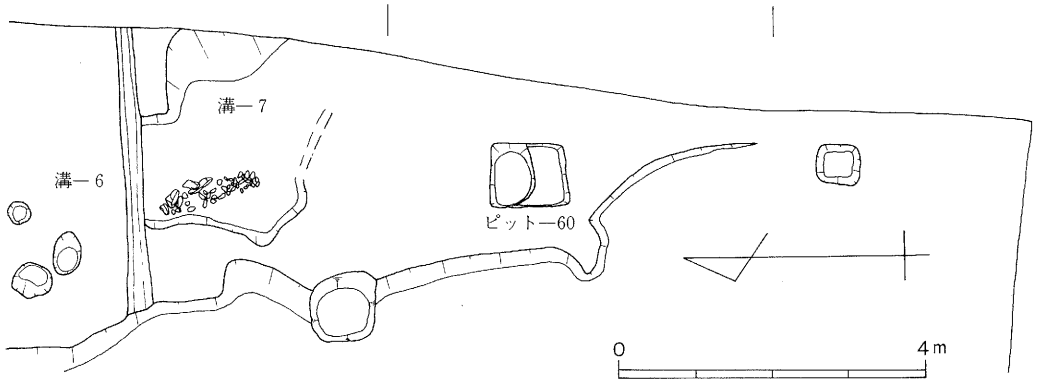


図14　Ⅱ区東端上層遺構図

④溝（図版４）

溝—１・２は幅30～40cm、深さ10cm未満の浅い南北方向の溝で、柵—１より新しい。溝—６も東西方向の溝で、同時期と思えるが、時期・性格は不明。

溝—３は、幅約30cm、中央で途切れるが、長さ260cm、ほぼ東西方向の溝である。溝—３は、建物—２より新しく、土師器小皿(42)が出土している。

溝—４は、Ｙ字型で、西側は崖面で断絶し、東側は次第に高く、浅くなり消滅する。上端での最大幅180 cm、底面での最大幅70cmを測り、３条の枝溝の合する中央部分がやや広く、最も深くなる。そこから北東と南東へのびる２条の枝溝は、底面に20cm前後の奥行きのステップ状の施設が見られる。この事実から、この溝状遺構が、道としての性格を有していたものではないかと考えられる。

溝—４からの出土遺物は、須恵器提瓶、円筒埴輪(図28)、鉄製の鏃(図40)があり、６世紀前葉の遺物に限られる。これらのことから、溝—４は、古墳に伴う墓道と考えられる。あるいは、溝—４の東側に円墳が存在し、溝—４はその周溝であるのかもしれない。いずれにしても、古墳は建物群建築の際に、完全に削平されたようである。

溝—５は、Ⅱ区南西端に位置し、深さ約２ｍの溝である。幅、規模は不明であり、調査地の西側へ、更に続いている。埋土の堆積状況から、12層褐色土堆積の後、一度掘り返され、５層茶褐色土堆積の後に上面を整地しているようである。

出土遺物は掘り返し、整地の際の混入があるためか、上層と下層との時期差が明瞭でないが、溝が掘削されたのが７世紀初頭頃、掘り返されたのが７世紀中葉頃ではないだろうか。そして、７世紀後葉頃には、廃絶されたと考えられる。(図30・31)

このように考えると、溝—５は、建物群と時期が一致し、建物群に伴うものであると想定される。そして、溝が等高線に平行にのびること、水はけのよい斜面地に立地するため大規模な排水を必要としなかったであろうことを考えると、この大規模な溝は、建物群を画するために

築かれたのではないかと考えられるのである。

溝－７は、Ⅱ区東端の上層で確認され、暗橙色粘質土上面で検出された。最大幅は約280㎝、深さ30㎝未満で、溝よりも落ち込みと考えるほうが適切かもしれない。溝－７は溝－６より古く、中央に自然石を積み上げたような施設が見られる。

遺物は、須恵器杯蓋(43)、須恵器瓶子(44)などが出土している。両者はかなりの時期差が考えられるが、瓶子が石積み内から出土していることから、瓶子が溝－７の時期を示すと考えられる。瓶子は静止糸切り底で、古墓－１出土の瓶子に似ている。古墓と何らかの関係を有する溝と考えられる。

⑤炉

炉－１は、建物－２の北側で検出され、西側斜面に築かれている。南北116㎝、東西80㎝のほぼ方形に浅く掘り込まれており、床面には激しい凹凸がみられる。壁面には粘土の貼り付け等は認められず、花崗岩の岩盤を壁面とする。花崗岩は火を受け、赤変し、もろくなっている。床面には若干の炭も残っていた。床面近くから、立ち上がりを有しない須恵器杯身が出土している。おそらく、住居に伴うものであろうが、住居内とは考えられず、屋外炉と考えられる。

炉－２～４は、Ⅱ区西端の溝－５上面に、溝廃絶後、第４層黒褐色土に掘り込まれている。いずれも小規模なものであり、炉－２は南北100㎝、西側は調査範囲外へ続き、深さは約５㎝にすぎない。炉－３は、36㎝×44㎝のほぼ円形であり、ピットの深さ約７㎝、ピットの周囲には４㎝前後の厚さで硬く焼きしまった焼土がおおっている。炉－４は更に小さく、直径19㎝の円形、やはり、焼土が残っていた。炉－２から鉄滓が、炉－３から鉄釘が出土している。

炉－２～４の全面を覆うように、灰、炭が残っており、その中から鉄釘、鉄滓、銅滓が出土している。土器が認められないため、その時期は溝が廃絶された７世紀後葉以後と言えるのみである。しかし、後述するように、鉄釘が古墓－１から出土した鉄釘と近似しており、古墓－１、あるいは他の古墓の営造に関係するのではないだろうか。炉の上部施設は知ることができないが、規模から考えると、一度限りの使用と推定され、鉄滓・銅滓が同一場所から出土していること、そして鉄滓・銅滓が小片であることも、それを示すものであろう。

鉄釘は４点(172～175)、鉄滓は８点、銅滓は４点出土している。鉄釘は、未製品と思われるものを含む。鉄滓は鉄分を多く含んだ小片が多く、銅滓は薄い黒色の小片で、表面に緑青がみられる。

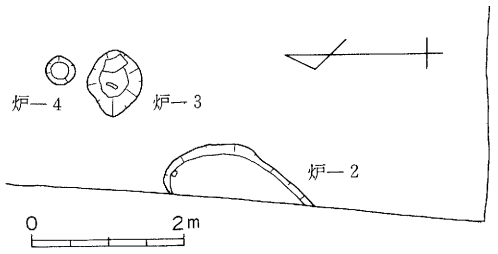


図15　Ⅱ区西端上層炉跡

⑥古墓

古墓はⅠ区で2基、Ⅱ区で2基確認された。いずれも、炭、灰を含んでいることから火葬墓と考えられるが、壁面が火を受けている痕跡はなく、他所で火葬されたものと考えられる。

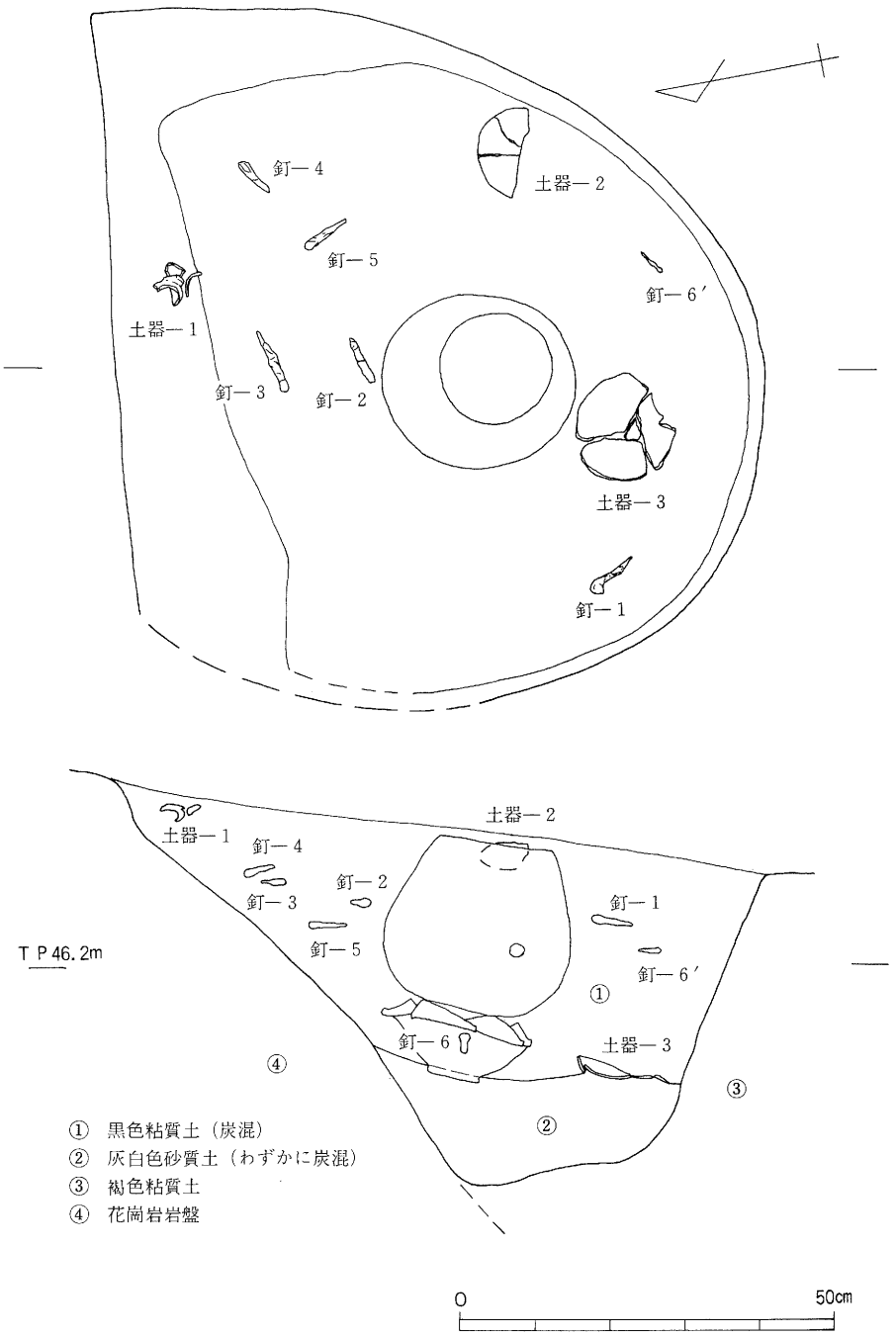


図16　古墓－1遺構図

古墓—1（図版5・6・9）

古墓—1は、Ⅰ区の地山傾斜面に営まれている。平面は半円形を呈し、直線部を北にする。その北壁のみ地山を壁面とし、他の円弧状部分は、地山上に堆積した褐色粘質土を壁面とする。東西86cm、南北92cm、深さ54cmの墓壙であり、底に14cm前後の厚さに灰白色砂質土がみられる。その灰白色砂質土上面に、緑釉陶器の椀と須恵質の壺がセットになった蔵骨器が置かれていた。

蔵骨器は、正立状態の緑釉陶器の椀に、須恵質の壺を倒立状態で重ねた形で出土した。器内からは、火を受けた人骨片、ガラス玉、若干の土器片、砂が見出された。これらの人骨等の量は、緑釉陶器の椀に納まるものではなく、おそらく、壺に入れた後、椀で蓋をし、それを倒立状態にして墓壙内に安置したものと考えられる。当然のことながら、器壁の薄い椀は、壺と土の重みで口縁部の破損がみられる。このような埋葬方法の類例は少なく、何らかの宗教観に基づくものと思われる。

この蔵骨器は、炭・灰を含む黒色粘質土で埋められており、灰白色砂質土上面で土師器の杯（5・土器—3）、黒色粘質土中層で鉄釘（6～12・釘—1～6）、上層で須恵器瓶子（3・土器—1）、土師器小皿（4・土器—2）が出土した。その出土状況から、蔵骨器安置時に土器—3を置き、蔵骨器がほぼ埋まった段階で土器—1・2が置かれたと考えられる。また、鉄釘は、木製の箱のようなものに伴うと考えられるが、釘—6と釘—6′が接合できたこと、釘—1～6が同一レベルで出土することから考えて、蔵骨器が木櫃のようなものに納めて埋納されたとは考えられない。また、おそらく古墓の上には若干の盛土が施されていたと推定されるが、削平のためか、確認することはできなかった。

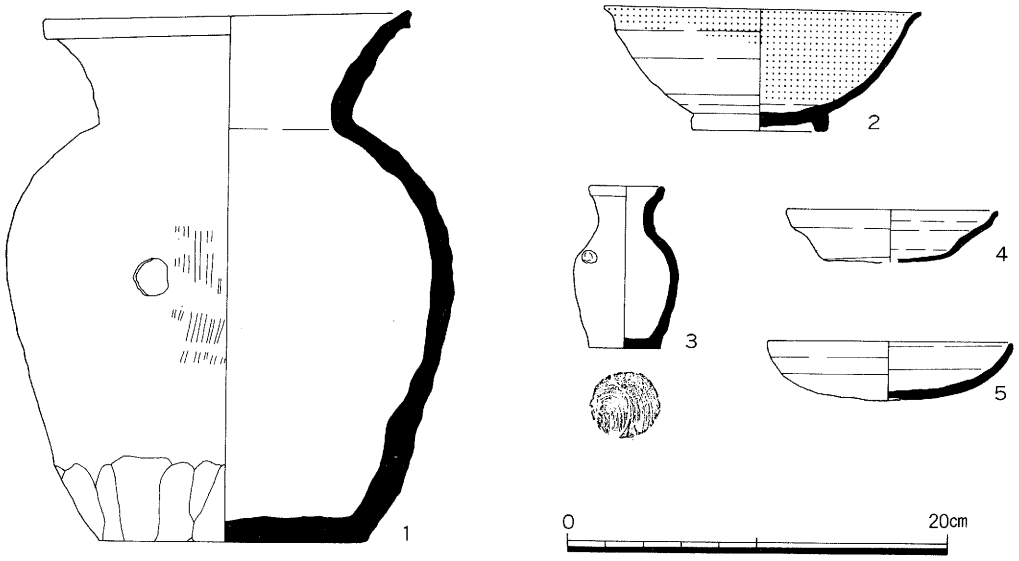


図17　古墓—1出土蔵骨器・土器

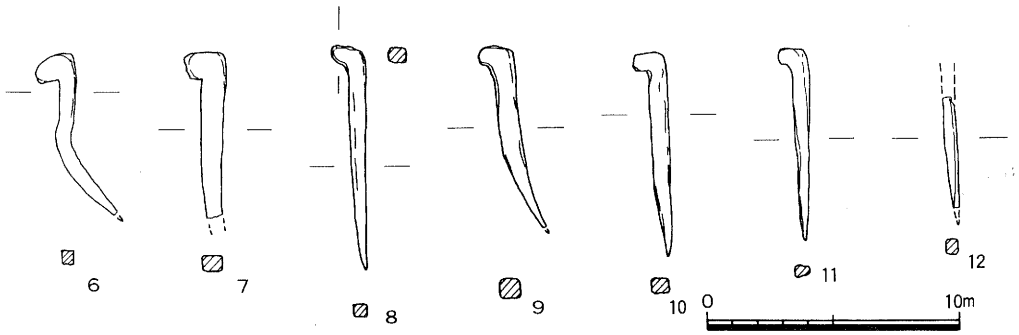


図18　古墓―1出土鉄釘

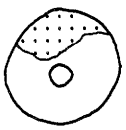
蔵骨器の壺は、須恵質陶器であり、平らな底部から立ちあがる体部は中央より上に最大径を有し、外反する口縁部に至る。口縁端部は、やや垂下気味に弱い凹面をなす。体部外面には、部分的に平行叩き目が残り、口縁部・体部は内外面とも回転ナデ調整で仕上げる。底部近くの外面はタテ方向のヘラケズリの後、弱いナデ、底部は内外面ともナデを施す。色調は淡褐色を呈し、口縁部から体部にかけて、暗緑色の釉が流れる。また、体部中央に、径2cmの打ち欠きが認められる。

緑釉陶器の椀は、やや深く、器壁は非常に薄い。口縁部は外反し、丸くおさめる。高台は貼り付けによるもので、断面正方形に近く、安定感がある。外面下半は回転ヘラケズリ、他は全面回転ナデ調整を施す。色調は淡黄灰色、淡緑色の釉は内面と外面口縁部に施されている。また、内面底部には、重ね焼きの痕跡が認められる。

土器―1(3)は、須恵器の瓶子で、底部回転糸切り未調整、体部・口縁部は回転ナデによって仕上げる。口縁部は外反した後、弱い段をなして上方へ屈曲する。口縁端部は厚く、丸くおさめる。体部に蔵骨器の壺と同様に、円形の打ち欠きが認められる。瓶子は体部中央で数片に割れており、その2片が蔵骨器内から人骨に混じって出土している。

土器―2(4)は、土師器の皿で、外反する体部が弱い段をなし、外反する口縁部へと続く。底部内外面ともナデ調整、口縁部は二段のヨコナデを施す。

土器―3(5)は、土師器の杯。体部から内弯気味に口縁部に至り、口縁端部はやや内側へ肥厚し、丸くおさめる。外面は指頭押圧とナデ、内面はナデを施し、口縁部は二段のヨコナデを施す。



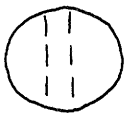


図19　古墓―1出土ガラス玉(1：1)

蔵骨器内から出土した人骨は、火を受け、非常にもろくなっており、その部位を知りうるものはない。人骨総量は274g で、一体すべての人骨ではなく、その一部と考えられる。

ガラス玉は、直径1.5cmのやや偏平な球形をなし、中央に孔が穿たれている。ガラス内には気泡・亀裂が多く見られるが、透明で良質のガラスである。

ガラスは火を受け、一部黒灰色に変色する。数珠玉であろうか。

その他に、蔵骨器内から11片の土器片が出土しており、２片は土器―１の破片、８片は土師器の同一個体の破片である。直径16cm前後の浅い皿になると思われる。体部は雑なナデ、口縁部は強いヨコナデを施し、外反した後、端部は上方へ軽くつまみ上げている。図化不能であった。他の１片も土師器片である。

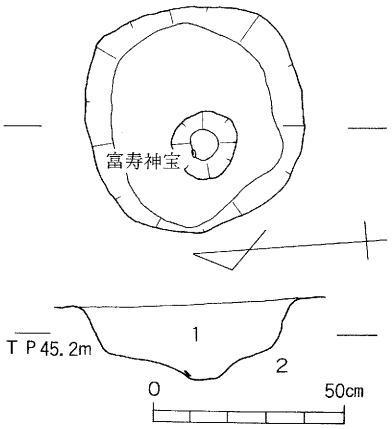
釘は７本出土しており、すべて頭部を一方へ折り曲げた形態の釘である。推定の平均長 7.9cm、中央部での太さは0.6×0.7cmである。頭部断面は、やや偏平な方形である。釘は木櫃状のものに伴うと考えられるが、木目等は遺存していない。そして、釘―１(６)、釘―４(９)が、中央で折れ曲がっていることから、釘が木櫃に打ちつけられた状態で強い外力が加えられ、釘が曲がったものと想像される。

以上のことから、古墓―１の埋葬過程を復元してみると、火葬は古墓―１以外の場所で人骨を木櫃に納めた状態で行なわれたと考えられる。そして、副葬された土器―１や蔵骨器内出土の皿を破砕する彼為、あるいは蔵骨壺、土器―１の体部を打ち欠くような行為を含む葬送儀礼が行なわれた。その後、蔵骨壺に骨を拾い集め、その際に、破砕された皿や土器―１の破片を意識的か無意識的かはともかく、とにかく蔵骨壺に入れている。ガラス玉は火を受けているので、人骨と共に焼かれたと思える。また、人骨は一体分すべてではなく、一部だけ拾い集めたのであろう。そして、古墓―１の場所に掘られた墓壙内に緑釉陶器の椀をかぶせた蔵骨壺を倒立状態に安置し、その横に土器―３を副葬する。その蔵骨器を埋めているのだが、埋土は、炭、灰、釘が混じっていることから、火葬した場所の灰などによるものと思える。ほぼ蔵骨器が埋まった段階で、土器―２、そして火葬の際に破砕した土器―１を副葬している。この段階で、再び儀礼のようなものが行われていると考えられる。最後に、若干の盛土を行ない、埋葬が完了するのである。蔵骨器、出土土器から、古墓―１は９世紀後葉から10世紀前葉頃であろう。

古墓―２（図版７）

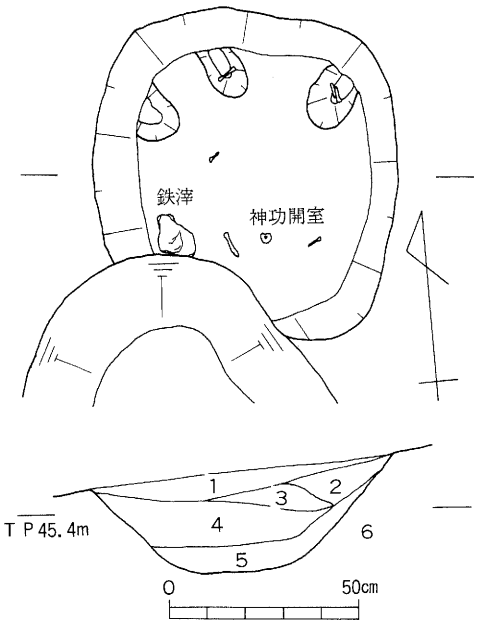
古墓―２は、Ⅰ区の崖面をなす地山落ち際で検出された。平面は直径約60cmの円形を呈し、二段に掘り込まれている。埋土は黒灰色粘質土で、炭・灰を含む。深さは約20cm、底近くから富寿神宝が二点出土している。

土器片は少量出土しているが、副葬されたと考えられるものはなく、釘も出土していない。富寿神宝は残存状態が悪く、発掘時にかなりの破損をみた。人骨も、全く遺存しない。やはり、他所で火葬され、富寿神宝を墓壙底に納めた後、人骨を炭・灰等と共に埋納したものと考えられる。



１．黒灰色粘質土　２．褐色粘質土

図20　古墓―２遺構図



1．暗褐色土　　4．黒灰色粘質土（炭混）
2．淡黒灰色粘質土（炭混）　　5．褐色砂質土
3．暗褐色土＋黒灰色粘質土　　6．褐色粘質土

図21　古墓―3遺構図

古墓―3（図版8、9）

古墓―3は、Ⅱ区東寄りで検出され、建物―1、土坑―2の上層に位置する。

東西80cm、南北85cm前後の隅丸方形状を呈し、中央での深さ27cmを測る。南西部は、現代のぶどう畑に伴う攪乱によって、一部削られている。

底面北辺には3箇所の小穴が穿たれており、その中、2箇所から釘が2本ずつ出土しているが、その性格は不明である。

やはり、人骨は遺存していないが、埋土が明瞭な層をなしており、遺物の出土状況から埋葬過程が推定できる。まず墓坑を掘削し、床面に褐色砂質土をしく。墓坑底に砂質土をしく行為は、古墓―1、4でも確認されている。そして、4層黒灰色粘質土が人骨の埋葬に当たると考えられる。黒灰色粘質土が最も炭、灰を多く含むためである。鉄釘も、ほとんど同層から出土している。同層上面から神功開宝と鉄滓が各1点出土している。この事実は、埋葬後に、副葬品を置き、儀礼を行なったことを示すと考えられる。その後、炭、灰を含む土と墓坑掘土によって埋められている。

鉄滓は、椀状を呈し、長径12.3cm、重量415g の大型のものである。土器等の副葬が認めら

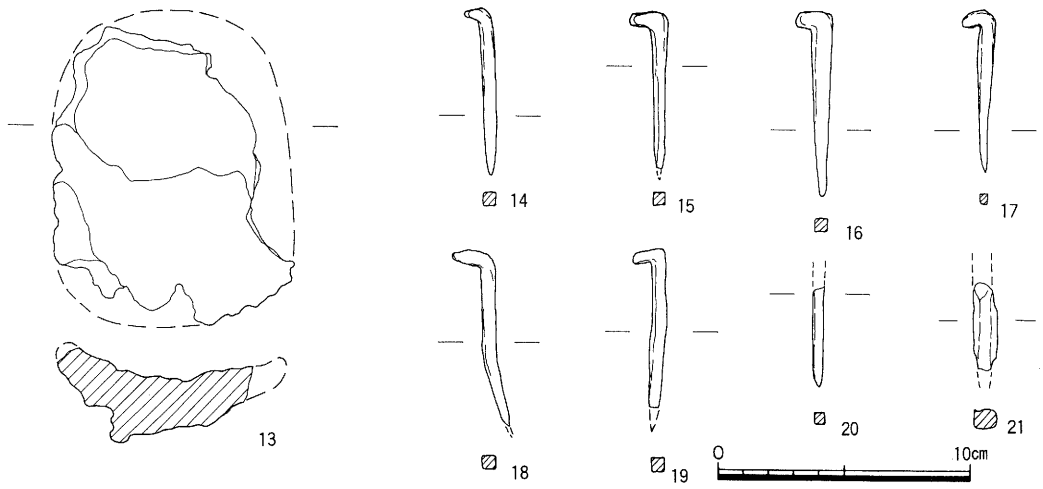


図22　古墓―3出土鉄滓・鉄釘

れないにもかかわらず、鉄滓が副葬されている事実は、被葬者の生前の生活に関わるものであろうか。

鉄釘は、古墓－１と同様、頭部を一方へ折り曲げた形態のものであるが、推定平均長7.0cm、断面0.5cm四方とやや小型である。

古墓－４（図版７）

古墓－４は、古墓－３の南西5.4ｍに位置し、東西56cm、南北59cmの不整形を呈する。古墓－４は、表土下約15cmで検出され、上面は削平を受けている。

古墓－３と同様の埋葬過程が考えられ、３層黒灰色粘質土が人骨の埋葬時の層であろう。やはり、３層上面から和銅開珎２点が出土している。

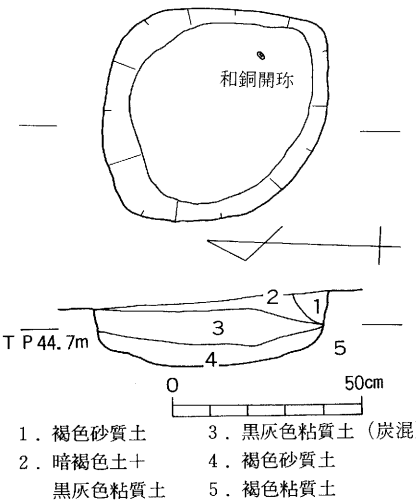


図23　古墓－４遺構図

古墓－２～４は、土器の出土を見なかったが、皇朝十二銭中、３種５点が出土しており、その年代をほぼ推定できる。銅銭の年代は、和銅開珎・708年初鋳、神功開宝・765年初鋳、富寿神宝・818年初鋳である。このことから、古墓－４は８世紀前葉頃、古墓－３は８世紀後葉頃、古墓－２は９世紀前葉頃と考えられる。各古墓からは、銅銭が一種類しか出土しておらず、この年代を適用してよいと考えられる。

古墓－１は９世紀後葉～10世紀前葉頃と推定され、各古墓は40～60年前後の隔たりを有するようである。これら四基以外にも、炭の出土する浅いピットも存在したが、古墓と断定できるものはなかった。後世の削平による消滅も考えられるが、それほど多数の古墓が集中していたとは思えない。つまり、４基、多くとも10基に満たないであろう古墓が約150年の間に、数十年間隔で営まれたと考えられる。このような営まれた方から、被葬者は氏族の代々の長か、もしくは西方平地に存在した家原寺、あるいは知識寺の中心的な僧侶の墓とも考えられる。そして、調査地が南西斜面で家原寺を見下ろす地にあること、その年代が８～９世紀で、家原寺と時期が一致することから、家原寺の僧侶の墓地であった可能性が強いと考えられる。

図24　古墓－２～４出土銅銭（１：１）

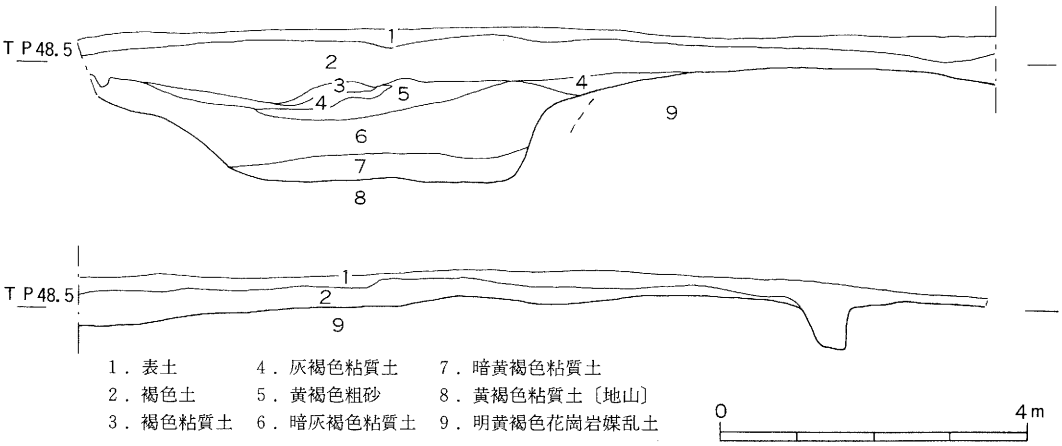


図25　Ⅲ区東壁土層図

以上の遺構は、総てⅠ・Ⅱ区から検出されたものであり、Ⅲ区では遺構は検出されなかった。但し、Ⅲ区北端近くの溝状の落ち込み内から埴輪、鉄滓等が多数出土している。

2．遺物

出土遺物は、須恵器、土師器、緑釉陶器、埴輪、土製品、屋瓦、鉄製品、銅銭、鉄滓、銅滓等であり、古墓出土遺物は前述したので、その他の遺物について記述していく。

①土器

各遺構別に述べ、最後に包含層出土土器について記述する。

a．ピット（図版10）

22・23は、柵―1のピット―2から出土。22は、須恵器杯蓋。天井部と口縁部の境に弱い稜がめぐり、天井部は回転ヘラケズリ調整。23は、土師器杯。口縁はヨコナデ、丸くおさめる。

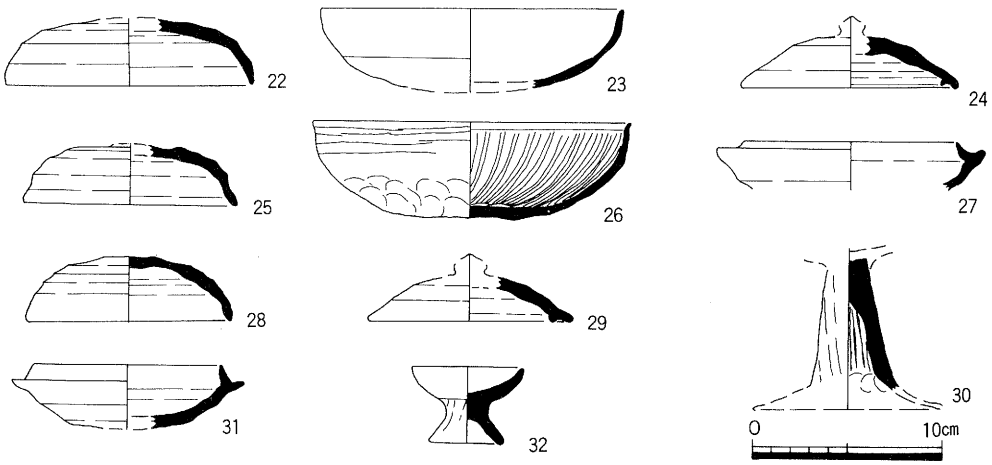


図26　ピット出土土器

24は、建物―1出土の須恵器杯蓋。内面にかえりを有する。25は、建物―3・ピット―26から出土した須恵器杯蓋。天井部は、回転ヘラ切り未調整。26は、建物―4・ピット―34から出土した土師器杯。底部外面は指頭調整、口縁部外面ヘラミガキを施す。口縁端部はヨコナデ、外反する。内面は放射暗文がみられ、内底面にはラセン文の痕跡が残る。27は、建物―7・ピット―53から出土した須恵器杯身。立ち上がりは低く、内傾する。

28は、ピット―55から出土した須恵器杯蓋。丸味をおびた天井部は、回転ヘラ切り未調整である。29は、ピット―56から出土した須恵器杯蓋。内面のかえりは、厚く、低い。30は、土師器高杯の脚柱部。ピット―57から出土。外面タテ方向のナデ、内面はシボリ目が残り、裾部は指頭痕がみられる。31は、ピット―58から出土。須恵器杯身で、出土遺物中では立ち上がりの高いものである。底部外面回転ヘラケズリ調整。32は、ピット―59から出土した、小型手捏ねの高杯である。杯部は丸味をおび、比較的深く、脚部は裾広がりである。

b．土壙（図版10）

33・34は、土壙―1から出土の土師器小皿。33は、底部指頭調整、口縁部ヨコナデを施す。34は、全面指頭とナデによる調整である。

35は、土壙―2から出土。土師器の小型壺で、体部最大径は中央よりやや上になり、口縁部は直立気味から外反する。外面ハケ調整からナデ、内面ヘラケズリからナデ、口縁部はヨコナデを施す。

c．溝（図版10・11）

42は、溝―3から出土した土師器皿。表面剝離が著しい。底部ナデ、口縁部ヨコナデを強く施し、端部は丸くおさめる。

溝―4からは、須恵器の提瓶1点と、多数の円筒埴輪が出土している。提瓶(36)は、頸部近くに厚い把手が付き、外反する口縁部は端部で肥厚し、やや上方へつまみ上げている。提瓶としては古いタイプのものである。なお、円筒埴輪については後述する。

溝―5からは、多量の土器が出土している。まず、上層出土土器から記述する。須恵器杯蓋（45～48）は、内面にかえりを有しないもの(45)と、かえりを有し、宝珠つまみの付くもの（46～48）がある。杯身も同様に、低い立ち上がりを有するもの（49～51）と、立ち上がりのみられないもの(52)がある。53・54は、長頸壺の口縁と体部である。口縁は次第に外反し、端部は丸くおさめる。体部は、最大径の位置に、2条の凹線をめぐらせる。55は、中空の無蓋高杯脚部である。裾端部は垂下する。

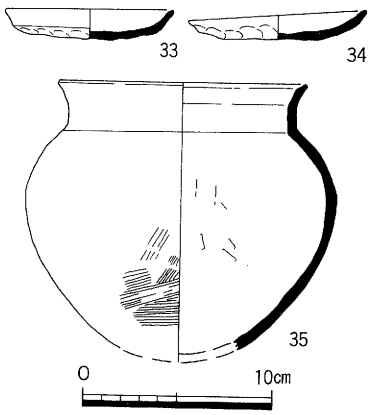


図27　土壙出土土器

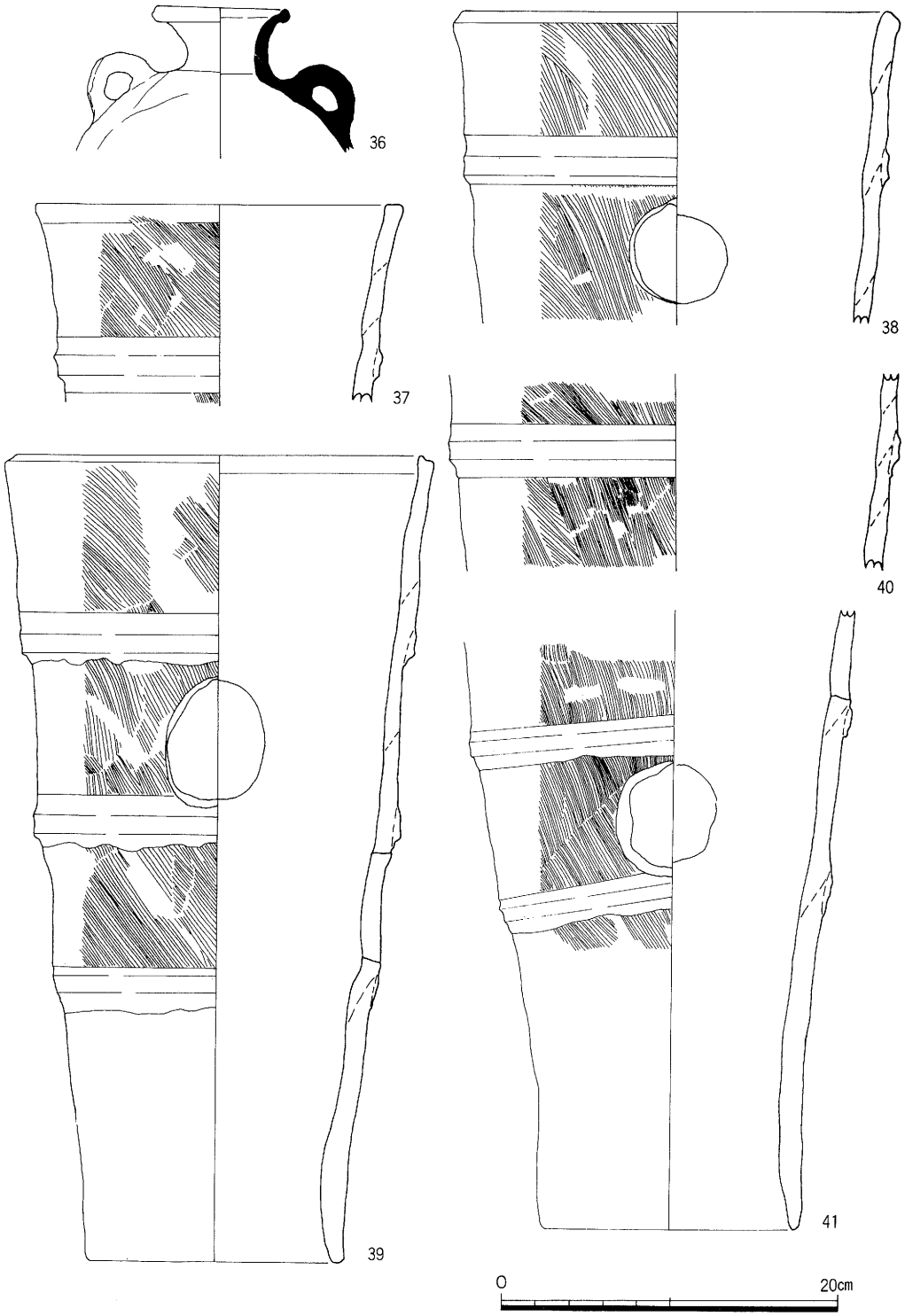


図28　溝―4出土須恵器・埴輪

56・57は、土師器の杯。56は、ナデ調整を施すが、暗文の有無は不明。端部はやや外反気味に丸くおさめる。57は、口縁端部外反し、強いヨコナデを施す。外面底部は指頭調整、凹凸が顕著。口縁部はヨコナデ。58は、土師器の皿。口縁端部は外反する。外面底部ヘラケズリ、内面に放射暗文がみられる。

溝―4下層からは、甕類の出土を多く見た。

59は須恵器の蓋。口縁端部凹面をなし、全体にシャープな仕上がりである。60は、立ち上がりを有する杯身、61～63は、立ち上がりを有しない杯身である。

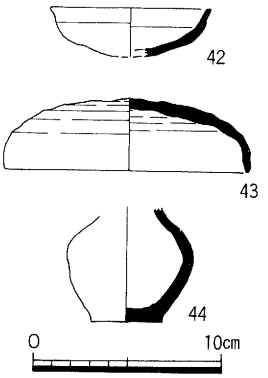


図29　溝―3・7出土土器

64～67は、土師器の杯。64は、口縁端部やや外反する。65は、口縁端部外反せず、丸くおさめる。体部外面指頭調整、口縁部ヨコナデ、内面に放射暗文がみられる。66・67は、小型の杯。66は、口縁部外反し、67は、体部からまっすぐのびる。共に、口縁部ヨコナデ、体部ナデ調整。

68は、口径23.6cmの皿。体部外面ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキ。内面斜放射暗文が一部残る。器壁は比較的厚い。

69は鍋。平底で、器壁は薄く、口縁部は外反する。把手は、弯曲の強いものと思われる。底部外面一方向へのヘラケズリ。体部下半は、0.5～1cm幅のヘラケズリ。体部上半はナデ、口縁部ヨコナデ。内面は、底部をナデ調整、体部はヨコ方向のハケメとナデの併用で調整する。

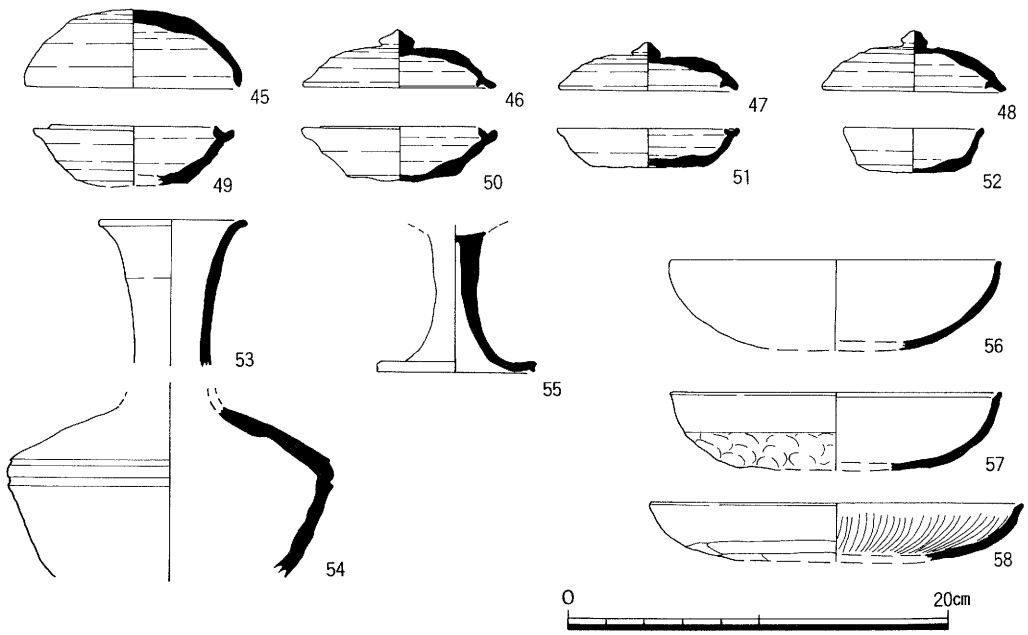


図30　溝―5上層出土土器

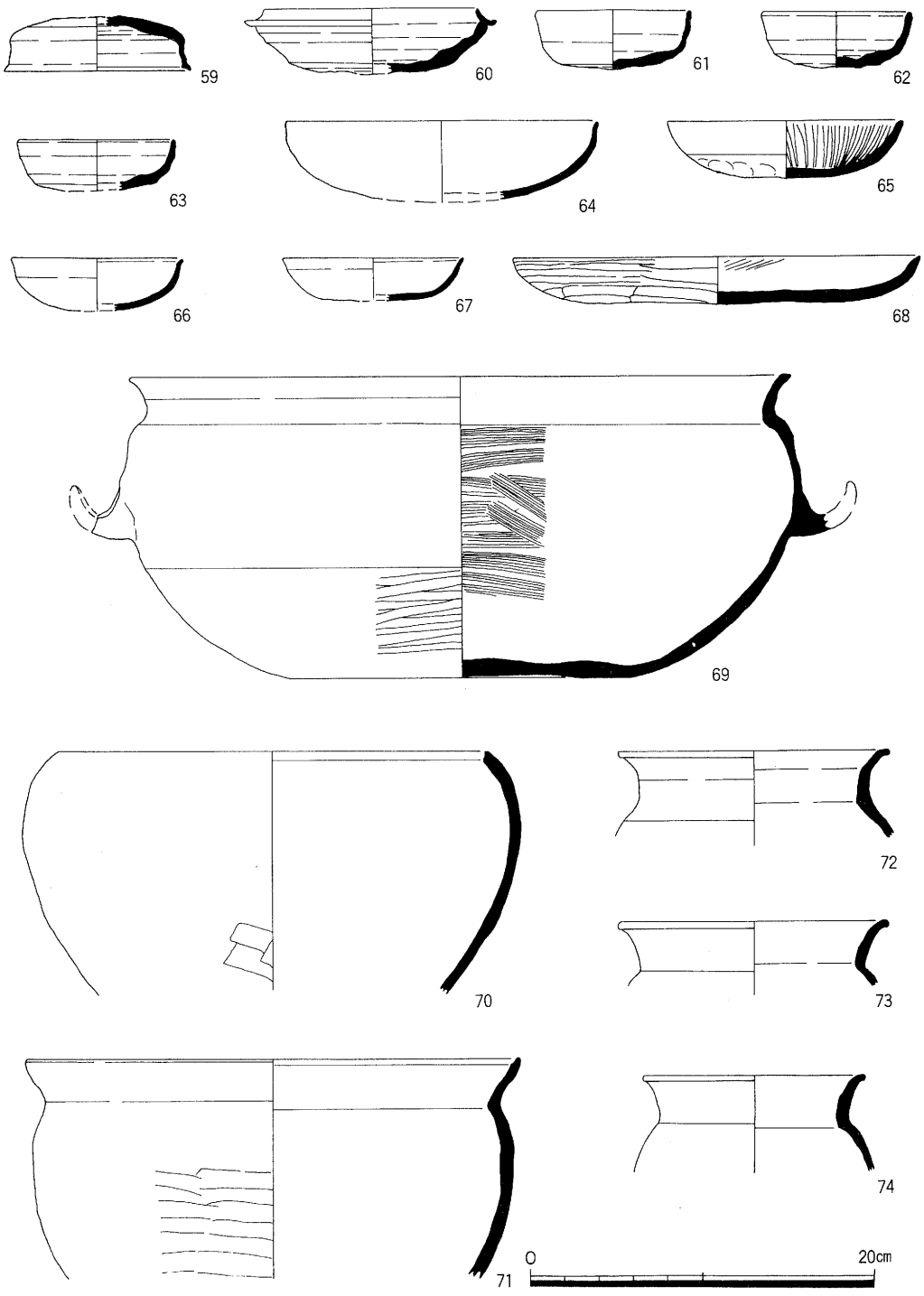


図31　溝―5下層出土土器

70は、体部から内弯する口縁部を有する鉢。外面下半ヘラケズリ、内面ナデ調整。

71は、甕。外面ヘラケズリからナデ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ調整。

72～74は、甕の口縁部。いずれも、口縁部ヨコナデし、外反する。体部は内外面共、ナデ調整。

溝－7からは、遺物があまり出土していない。43は、須恵器杯蓋。天井部回転ヘラ切り未調整。44は、須恵器瓶子の体部。底部静止糸切り未調整。古墓－1出土の瓶子に近似。

d．Ⅰ・Ⅱ区包含層（図版12・13）

Ⅰ・Ⅱ区からは、多数の土器が出土しているが、土師器は、良好なものが少ない。

須恵器杯蓋は、蓋内面にかえりを有しないもの（75～79)、宝珠様つまみを付し、蓋内面にかえりを有するもの（80～83)、かえりの消失したもの(84)がみられる。

杯身も同様に、立ち上がりを有するもの（85～92)、立ち上がりの消失したもの(93～101)がみられる。85は、高い立ち上がりを有し、端部は凹面状をなす。溝－4南東の落ち込みから出土しており、おそらく、溝－4出土遺物と同様に、古墳に伴うものであろう。

102～105は、壺・甕の口縁部。102は、口縁部肥厚し、口縁部外面に2条の凹線がめぐる。口縁直下に1条の凹線、頸部にも3段に計5条の凹線がめぐり、その後、2段の波状文を施す。波状文は、1単位の幅が広く、粗雑である。

106は、長脚二段高杯の脚下半部。透しは、三方二段である。脚裾部に凹線を施し、段をなす。脚端部は、やや上方につまみあげた形態である。

107は、提瓶。把手はその機能を失っている。頸部外面にヘラ記号あり。

須恵器は陶邑Ⅱ－4～Ⅳ－1段階の時期を示す。

土師器の杯は、体部をナデ、口縁部をヨコナデするのが一般的な手法であり、底部外面には指頭痕の残るものも多い。底部外面をヘラケズリするものは、108のみである。内面は磨滅しているものが多く、暗文の有無が不明なものが多いが、放射一段暗文を施すものが一般的である。122は、断面三角形の貼り付け高台を有する。

123は皿。内面に放射暗文がみられる。口縁端部はやや肥厚し、内傾する面をなす。

124～127は高杯。124は、比較的深い杯部を有し、他は浅い。口縁端部は、つまむようにヨコナデする。127は、放射暗文を施す。

128～130は、小型の高杯。杯部はいずれも浅い。脚部内面をナデで調整するもの（128)、棒状のものに粘土を貼り付け、脚部を整形するもの（129)、脚柱部中実のもの（130）がある。128・129の脚は二段に屈曲するが、130は屈曲せず、低い脚部である。いずれも、手捏ねによるものであり、指頭押圧、ユビナデによって整形する。

131は、甕の口縁部。端部は外反し、丸くおさめる。口縁部ヨコナデ、体部は内外面ともナデ調整。

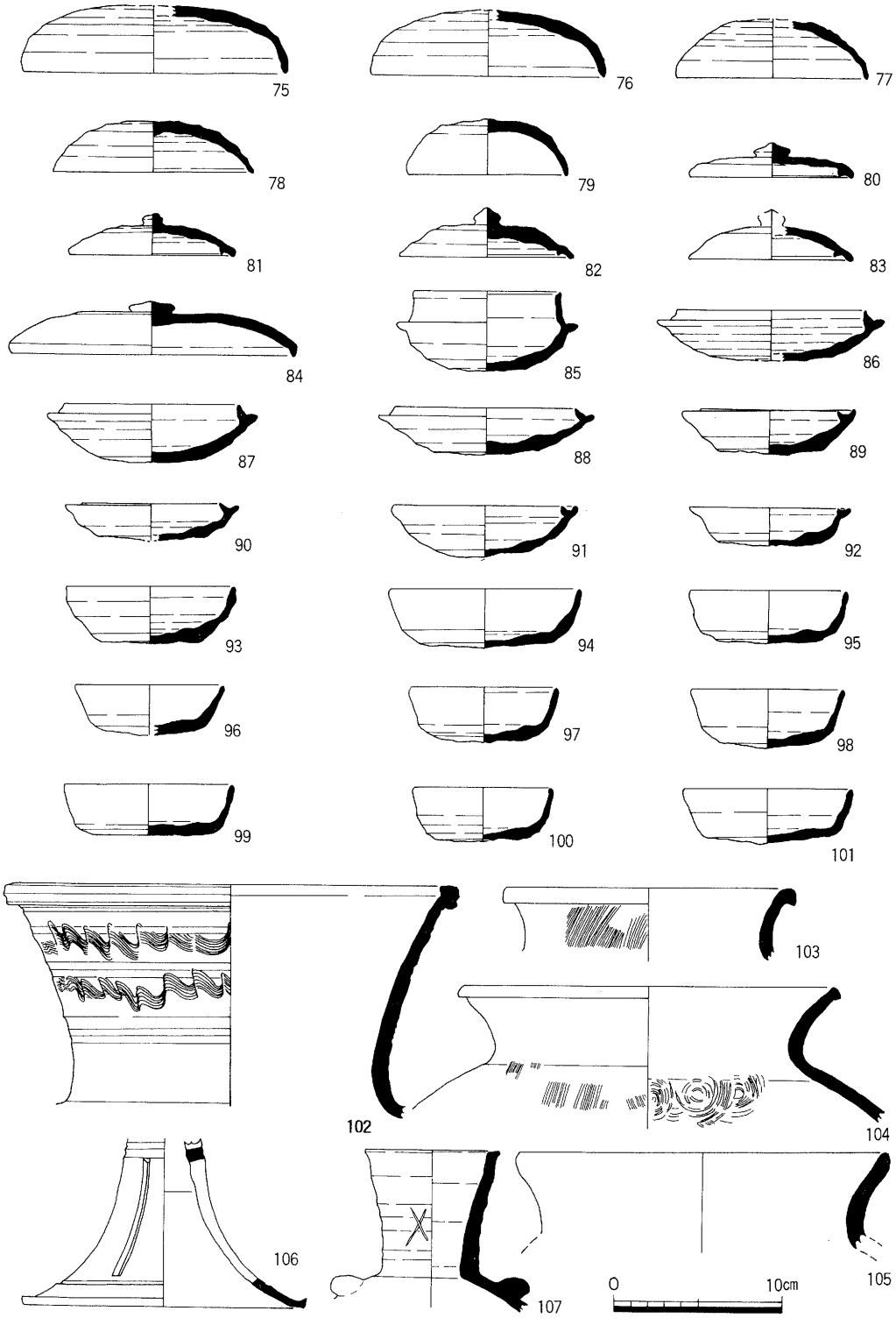


図32　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土須恵器

132は、羽釜の口縁部。口縁部は先細りに外反し、鍔は薄く、やや上向きになる。口縁部内面ヨコハケからナデを施す。色調は褐色を呈する。

羽釜と同質の胎土で作られた竈の破片も多数出土しているが、図化できなかった。

土師器は、飛鳥－Ⅰ～Ⅴの時期のものである。

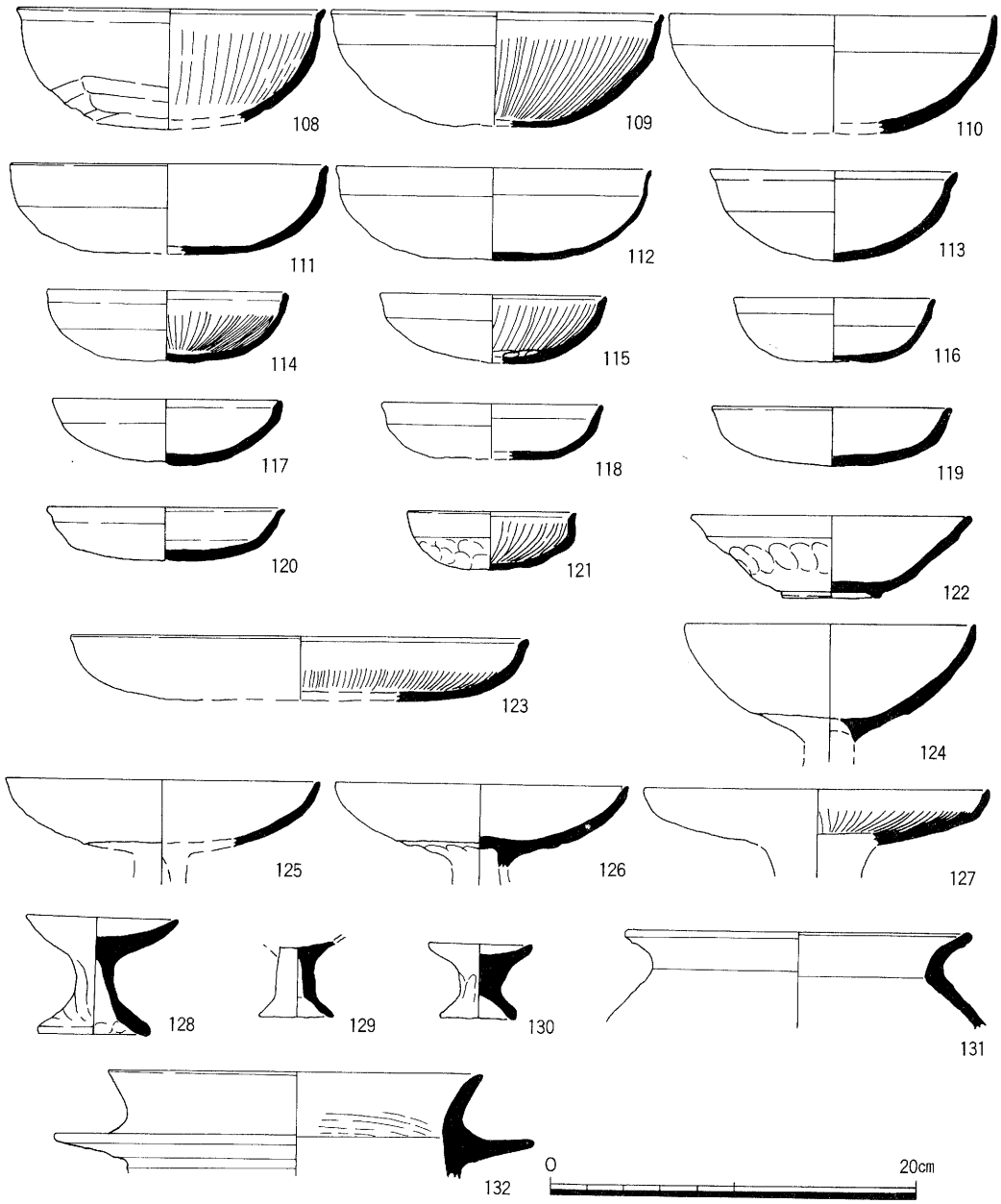


図33　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土土師器

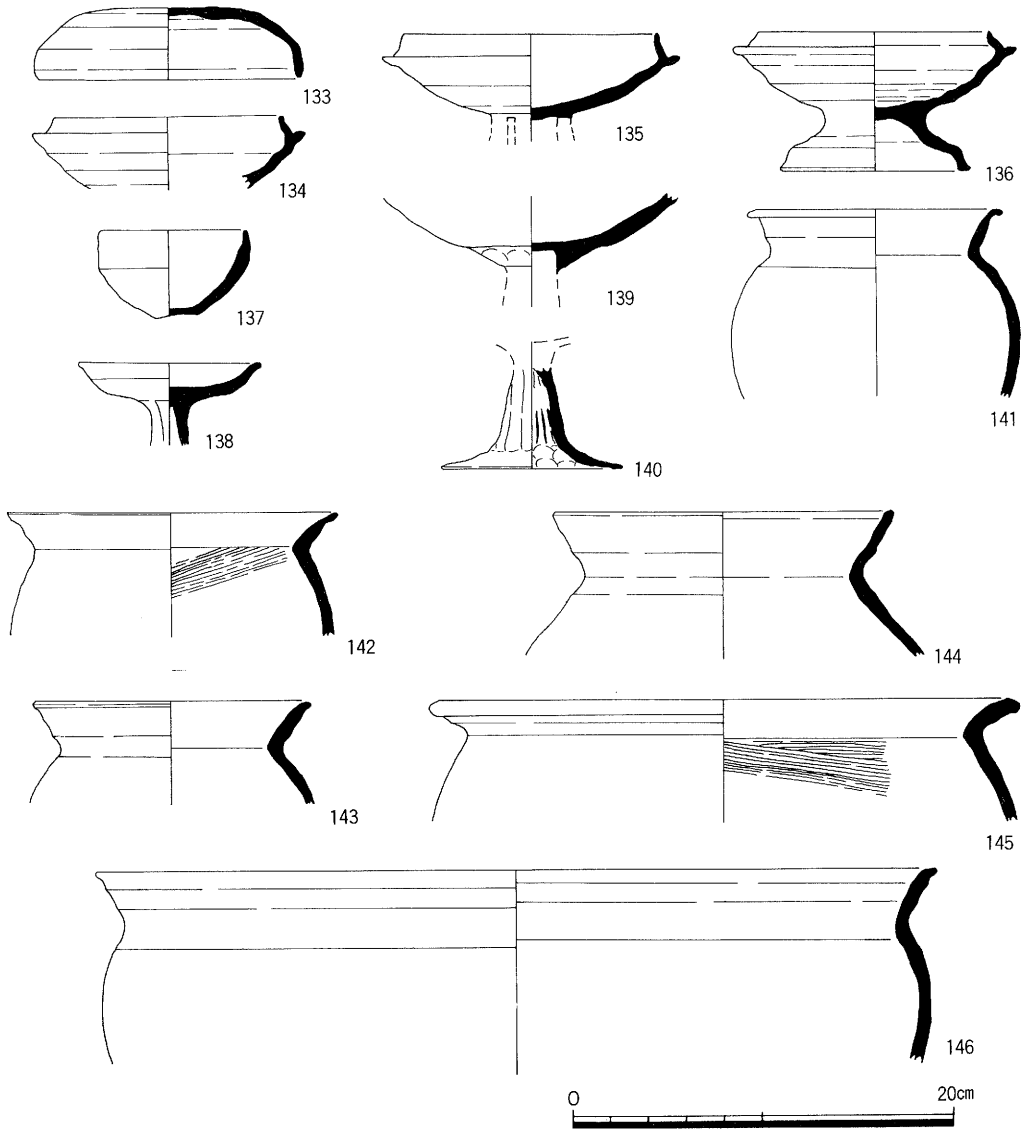


図34　Ⅲ区包含層出土土器

e．Ⅲ区包含層（図版14）

Ⅲ区は、良好な包含層が遺存せず、Ⅰ・Ⅱ区よりも比較的古い土器が多い。

133は、杯蓋。天井部回転ヘラケズリ。134は、杯身。低い立ち上がりを有する。

135･136は、有蓋高杯。135は、脚部欠損するが、三方の長方形透しを有するものである。

136は、低く、外方へ張り出す脚部を有する。

137は、手捏ねの小型の椀。口縁部をヨコナデする。

138 ～ 140は、高杯。138は、浅い杯部を有し、口縁端部は外反する。139は、杯底部と体部の境に弱い段をなす。140は、裾広がりの脚部。外面タテ方向のナデ、裾部指頭調整。

141～145は、甕の口縁部から体部にかけての破片である。141は、球形に近い体部を有し、口縁部は外反した後、端部外方へ屈曲する。体部内外面共、ナデ。142は、体部外面ナデ、内面ヨコ方向のハケ調整。143・144は、体部内外面共、ナデ調整。145は、大形の甕。口縁部は厚く、強く外反する。体部内面、ハケ調整。胴長の甕であろう。

146は、鍋。おそらく、上方へ弯曲する把手がつくのであろう。口縁部は、三段にヨコナデし、体部は内外面共ナデ調整。

②埴輪

a．溝－4（図28・図版10）

溝－4からは、円筒埴輪片が多数出土している。色調は暗黄褐色、淡灰褐色、暗橙色と三類に分類できる。図化したものは、37が淡灰褐色である以外は、総て暗黄褐色である。暗黄褐色の埴輪は、無黒斑で窖窯焼成であるにもかかわらず、断面黒色を呈し、焼成はやや不良である。

いずれも低い凸帯を有し、三凸帯四段と考えられる。外面タテハケ、内面ナデ調整。ハケは、5本/cmと、10本/cmを併用して仕上げる。器高は40～50cmであろう。

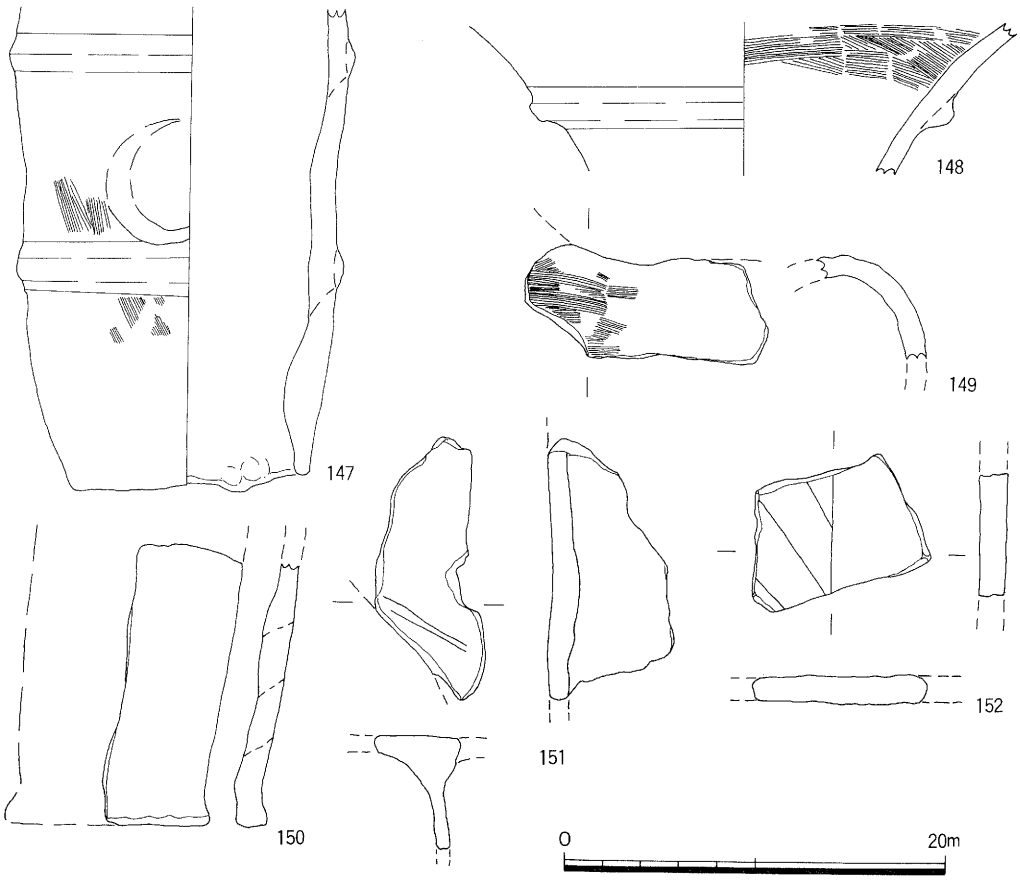


図35　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土埴輪

b．Ⅰ・Ⅱ区包含層（図版15）

147は、円筒埴輪。暗赤橙色を呈し、溝一4出土遺物に類似品はない。148は、朝顔形埴輪口縁部。凸帯は低く、丸味をおびている。内面ヨコ方向のハケ調整。

149・150は、馬形埴輪。149は、首から背にかけての破片と考えられ、外面ハケメが残る。150は、後脚の破片と考えられる。

151・152は、盾形埴輪であろう。151は、斜めに切り落とされ、盾の下端を示す。裏面には、円筒状になると思われる台部の取り付きがある。152は、綾杉状になると考えられる線刻を有する。板状で反りはみられない。

c．Ⅲ区包含層（図版15）

153は、家形埴輪の屋根部分。切妻の屋根頂部に、低い板状のものが取りつく。堅魚木をのせるためのものであろうか。

154・155は、蓋形埴輪。154は、板状で、両面に弧線からなる同一の線刻文様がみられる。155は、頂部に取り付くと考えられる。長方形状の一角を丸くえぐり、両面に、線刻がある。

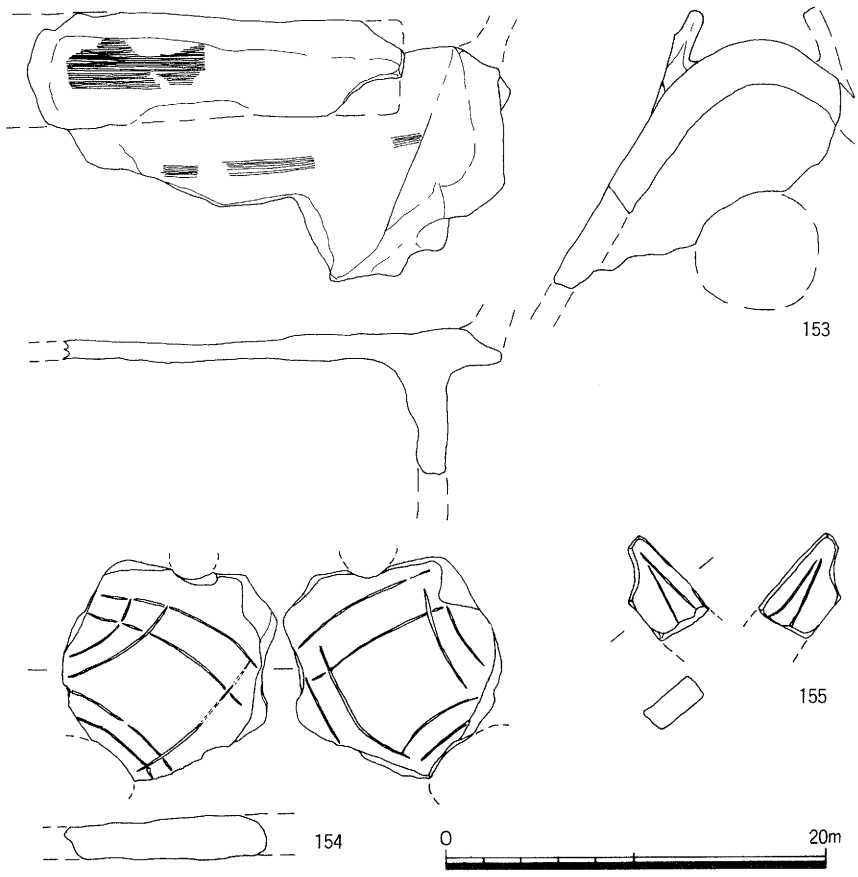


図36　Ⅲ区包含層出土埴輪

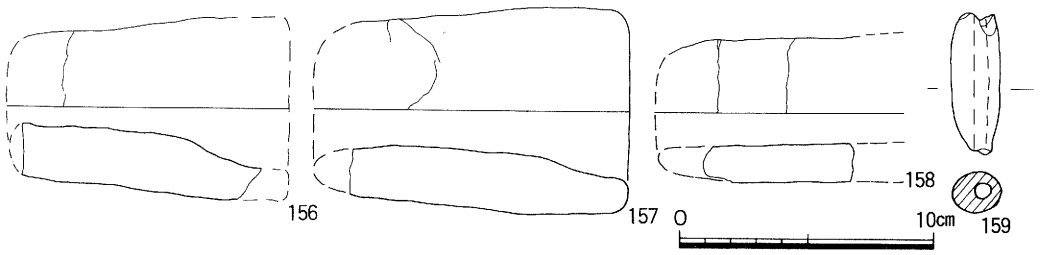


図37　包含層出土土製品

③土製品（図版16）

156～158は、鞴羽口。156は、先端部で厚く、孔が狭まっている。後端部は薄く、孔は裾広がり状になる。推定長11cm、最大径 7.2cm。157も、156と同タイプのものであるが、やや大振りである。推定長12.5cm、最大径8.2cm。158は、やや細く、筒状を呈する。いずれも、先端は融着物が認められ、変色している。総てⅢ区から出土している。

159は、土錘。流線形であるが、長さ5.7cm、最大径2.0cmとやや大型である。孔両端部には、ひもずれによる溝状の痕跡がある。Ⅱ区包含層出土。

④屋瓦（図版14）

160は、単弁八弁蓮華文軒丸瓦。推定瓦当直径16.2cm。中房には１＋４の低い蓮子を配し、弁は中央で稜をなし、小さい子葉を伴う。外区は無文。外縁は、内傾する面を有する。丸瓦とは、上下に粘土を補充して接合する。暗灰色を呈し、焼成はやや不良。丸瓦部は、ナデ調整を施している。

161～163は、平瓦片。161は、格子叩き目を有し、硬質である。側面は、ヘラケズリからナデ、凹面は布目が残る。162は、凸面ナデ調整の後、綾杉状の叩き目を施す。叩きは全面に施されていない。凹面には布目が残り、模骨の痕跡が浅く残っている。側面は、二度のヘラケズリを行なう。163は、凸面に長辺に平行する縄目叩きが施されている。凹面には布目が残り、模骨痕らしき凹凸がみられる。側面は、ヘラケズリを施しているようである。磨滅が著しい。161～163は、いずれも桶巻作りによると考えられる。

160～162はⅢ区から出土。163はⅡ区北東部から出土している。瓦の出土量は少なく、磨滅がみられることから、調査地よりも更に上の段に瓦を伴う建物が存在したと考えられる。

瓦の時期は、白鳳期である。

⑤鉄製品（図版14・17）

164は、土壙―２から出土した内反りの鎌の先端に近い部分である。中央での厚さは３㎜と非常に薄い。

165は、土壙―３から出土した刀子である。先端は鋭角をなし、最も厚い部分で、厚さ4.5㎜である。

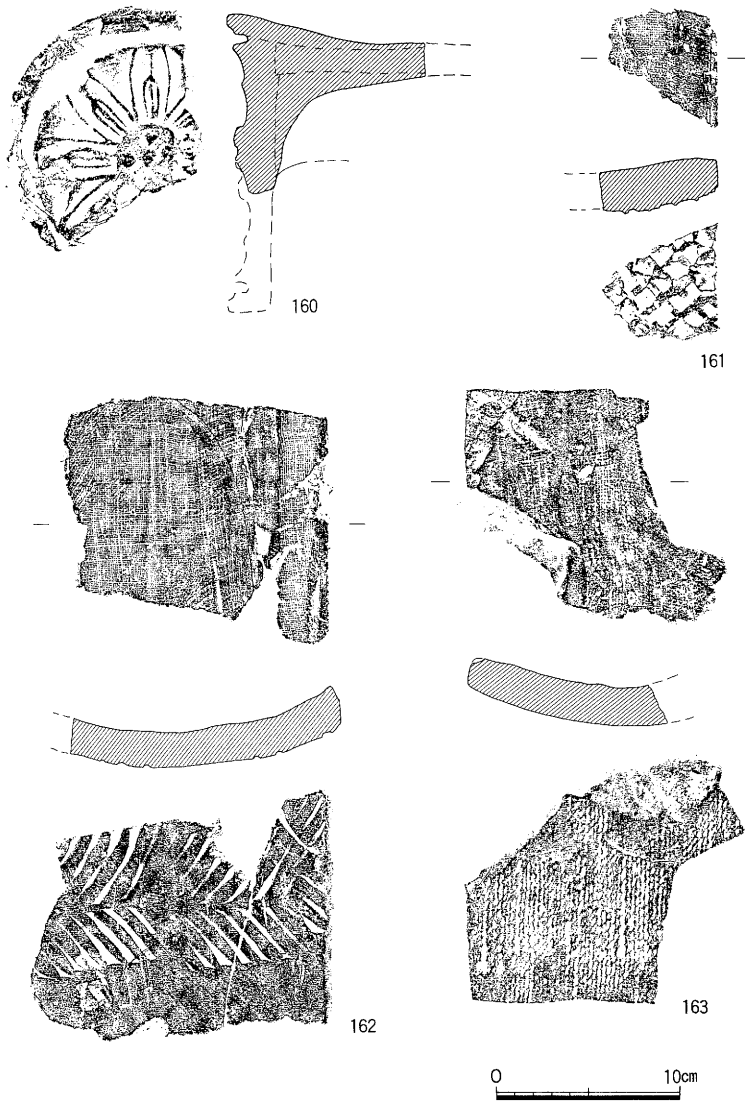


図38　屋　瓦

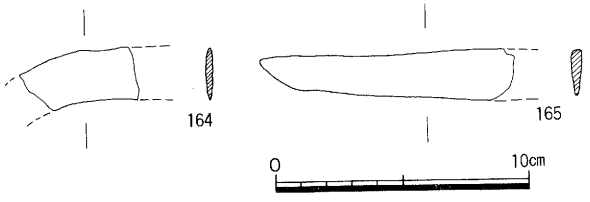


図39　土壙出土鉄製品

溝－4からは、鎹が5点出土している。いずれも木質が遺存している。166は、最も残存状態の良好であったもので、鎹、および周辺の土にも木質が残っていた。166～170によって鎹を復元すると、厚さ1cm前後の隅丸方形状の断面を呈し、90°～120°の角度で屈曲する。先端に近くなるほど、断面は扁平な方形となり、細くなる。木目は、いずれも鎹に対して直交する。

溝－4からは、須恵器の提瓶、円筒埴輪以外は出土しておらず、その時期は6世紀前葉頃と考えられる。これらの事実から、鎹は木棺に伴うものではないかと考えられる。鎹に残る木質は、木棺材であろう。おそらく、古墳が破壊された際に、埴輪だけでなく、埋葬施設まで破壊し、墓道と考えられる溝－4に埋没し、遺存したのであろう。

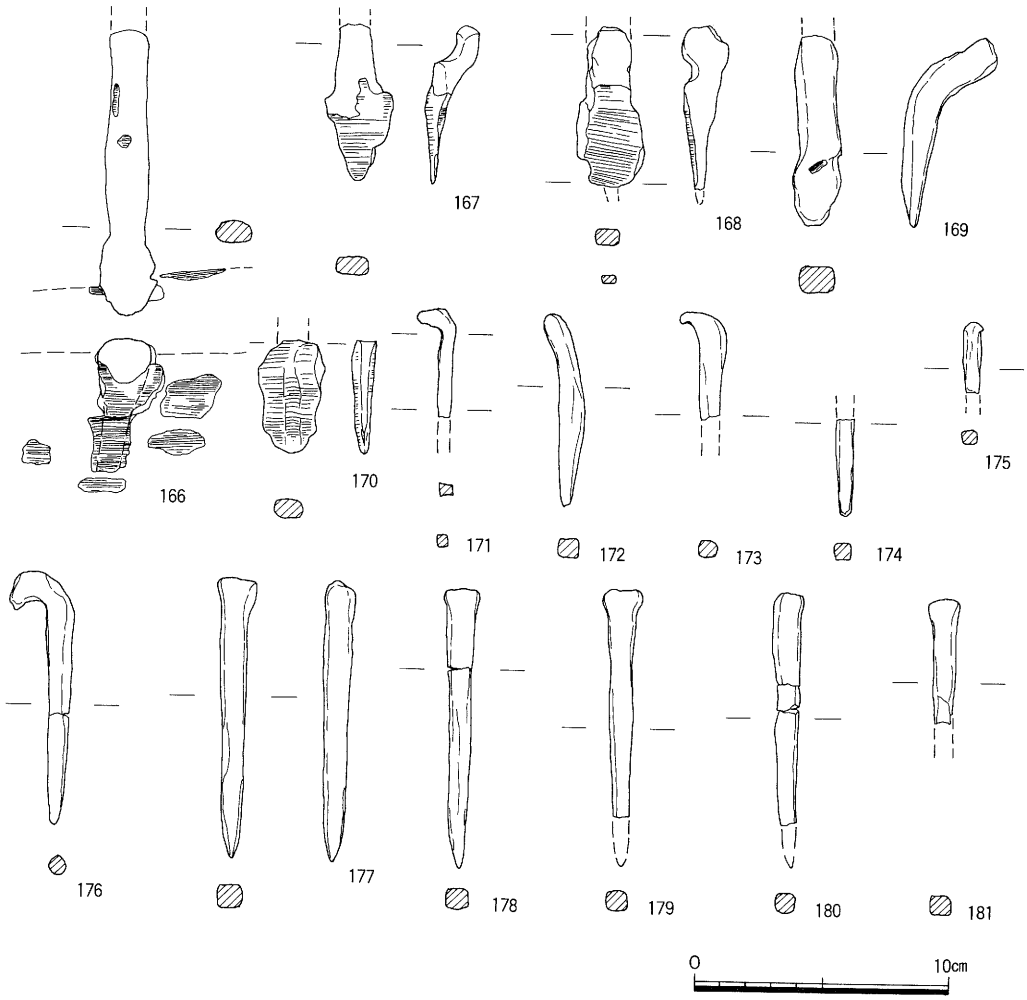


図40　鉄製品

鉄釘は表に示したように、古墓―１・３、ピット―81、炉―２～４上面、Ⅰ区、Ⅱ区から出土している。これらは、頭部の形状によって二類に分類できる。Ⅰ類は、頭部を一方へ折り曲げたタイプのものであり、Ⅱ類は頭部が扇状に開くタイプである。

古墓―１と古墓―３出土の鉄釘を比較すると、古墓―１出土鉄釘のほうが、長さで１cm、重量で２g ほど大きい。

炉―２～４上面で出土した鉄釘は、未製品・欠損品と考えられるが、その法量等は、古墓―１出土鉄釘に近い数値を示す。頭部を折り曲げようとした痕跡もあり、炉―２～４が、古墓―１に伴うものである可能性がある。

Ⅱ類の鉄釘は、Ⅱ区包含層から密集した状態で出土した。Ⅰ類に比して、法量・重量とも、かなり大型である。時期は不明。

番号	類	出土地	法量・cm	重量・g	番号	類	出土地	法量・cm	重量・g
6	Ⅰ	古墓―1	(7.3)×0.5×0.5	6	20	?	古墓―3	×0.4×0.4	(1)
7	Ⅰ	〃	×0.8×0.6	(10)	21	?	〃	×0.9×0.8	(5)
8	Ⅰ	〃	8.8×0.55×0.5	10	171	Ⅰ	ピット―46	×0.4×0.5	(4)
9	Ⅰ	〃	(7.8)×0.8×0.8	10	172	?	炉―2～4	7.6×0.8×0.7	(11)
10	Ⅰ	〃	8.2×0.7×0.6	9	173	?	〃	×0.8×0.7	(10)
11	Ⅰ	〃	7.6×0.6×0.4	5	174	?	〃	×0.7×0.6	(3)
12	?	〃	×0.6×0.5	(3)	175	?	〃	×0.6×0.5	(2)
14	Ⅰ	古墓―3	6.7×0.5×0.6	5	176	Ⅰ	Ⅰ区	10.0×0.6×0.6	26
15	Ⅰ	〃	(6.7)×0.5×0.5	4	177	Ⅱ	Ⅱ区	11.1×1.0×0.9	24
16	Ⅰ	〃	7.3×0.5×0.5	10	178	Ⅱ	〃	11.1×0.9×0.8	19
17	Ⅰ	〃	6.3×0.3×0.4	4	179	Ⅱ	〃	(11.0)×0.9×0.8	(20)
18	Ⅰ	〃	(7.7)×0.5×0.5	5	180	Ⅱ	〃	(11.0)×0.8×0.8	(15)
19	Ⅰ	〃	(7.3)×0.5×0.6	6	181	Ⅱ	〃	×0.8×0.8	(13)

鉄釘一覧表　( )内の法量は推定値、重量は現存値

⑥鉄滓（図版16）

鉄滓は、古墓―3、炉―2～4、Ⅱ区包含層、Ⅲ区包含層から出土しているが、Ⅲ区からの出土が圧倒的に多い。鉄滓は二類に分類でき、椀状のものと、塊状のものがある。椀状のものは、下方が凸面、上方が凹面をなし、炭等の付着が認められる。これは、鍛冶過程で生じた鉄分が溜まって生じたものであり、断面が層をなすものが多い。塊状のものは、飛び散った鉄分が固まったものであり、小さいものばかりである。

椀状の鉄滓は19点出土しており、最大のものは、長径17.4cm、短径10.6cm、厚さ 4.2cm、重量1070g である。Ⅲ区から出土している。これ以外のものは、長径12cm前後のもの4点と、7cm前後のもの14点に二分される。古墓―3出土の鉄滓は、前者に属する。塊状の鉄滓は、全部で57点出土している。

出土地別に、鉄滓の数・重量を比較してみると、古墓―3、1点、415g。炉―2～4、8点、80g 。Ⅱ区、3点、294g 。Ⅲ区、64点、6033g 。総重量6822g 。

⑦銅滓

銅滓は炉―2～4上面から4点出土している。3点は、長さ2～3cm、厚さ 0.4cmの薄い板状を呈し、重量は、7g 、6g 、2g である。1点は、径1cm前後の塊状を呈し、重量3g 。いずれも、表面に緑青がみられる。

第三章　ま　と　め

調査地の現状は、階段状をなすぶどう畑となっていたため、削平によって遺構が破壊されていることが心配された。事実、遺構はかなり削平されていたが、階段状の地形はぶどう畑の開墾に伴うものではなく、7世紀まで遡ることが確認された。このような成果をもとに、調査地における遺構の変遷を検討してみる。

今回の調査で発見された最も古い遺物は、6世紀前葉のものである。遺物は少量の須恵器と埴輪に限られ、この時期の遺構として溝－4があげられる。おそらく、溝－4は、古墳に伴う墓道であろう。遺物の出土状況から考えると、溝－4の東側に古墳が存在したと考えられる。また、Ⅲ区から出土した埴輪は、Ⅲ区北東に位置する円墳に伴うものであろう。今回の調査では、古墳を確認するには至らなかったが、調査地内に、最低1基の古墳が存在していたと考えられる。

ところが、これらの古墳は6世紀後葉には早くも破壊されたようである。溝－4内から木棺片まで出土しており、破壊は意図的なものであったと考えられる。古墳を破壊し、花崗岩の堅い岩盤を階段状に削平し、建物を建設するための造成を行なっている。この造成は、当時としては、かなりの土木工事であったと思われる。

建物群は6世紀後葉から7世紀後葉にかけて、数回の建て替えを行なって続いている。同時期に、大規模な溝－5も掘削されている。造成を行なってまでも、山地斜面に営まれた建物群は、いかなる性格を有するのであろうか。古墳を破壊していることを重視すると、古墳を造営した勢力が、建物群を営んだ勢力に取って変わられたと想像される。しかし、太平寺古墳群内には横穴式石室を有するものも存在し、その終末の時期が明確でないため、この考えを積極的に示す資料には欠けるのである。

調査地の西側の平地には、古代寺院の知識寺、家原寺が位置する。その創建時期は、7世紀中葉前後と考えられ、建物群は寺院建立後、あまり時を経ずして廃絶されたと考えられる。この建物群を支えていた氏族が寺院を建立したのか、逆に、その氏族が寺院建立によって勢力を失なったのかは確認できない。

また、鞴羽口、鉄滓は注目すべき遺物である。Ⅲ区から大量に出土していることを重視すると、調査地の更に東側に、鍛冶関係の遺構が存在したものと考えられる。しかし、時期を特定できるのは、古墳－3から出土した鉄滓のみであり、他は不明である。

柏原市内では、生駒山地西麓の大県遺跡、大県南遺跡の最近の調査で、大量の製鉄に伴う遺構・遺物が発見されている。そして、その時期は5世紀後葉から6世紀後葉頃と考えられる。今回出土した遺物は、古くとも6世紀後葉頃までしか遡りえず、大県・大県南遺跡と平行する

ことは考えられない。大県・大県南遺跡は、かなり大規模な製鉄遺跡であるにもかかわらず、6世紀後葉頃、急速に衰退するようである。おそらく、製鉄を営んでいた工人集団が、何らかの社会背景のもとに解体されたためであろう。そして、その一部の工人が、山地斜面に移り、なおも製鉄を営み続けたのではないだろうか。古墓—3の年代から、8世紀代までこの技術が伝習されていたことは確実である。

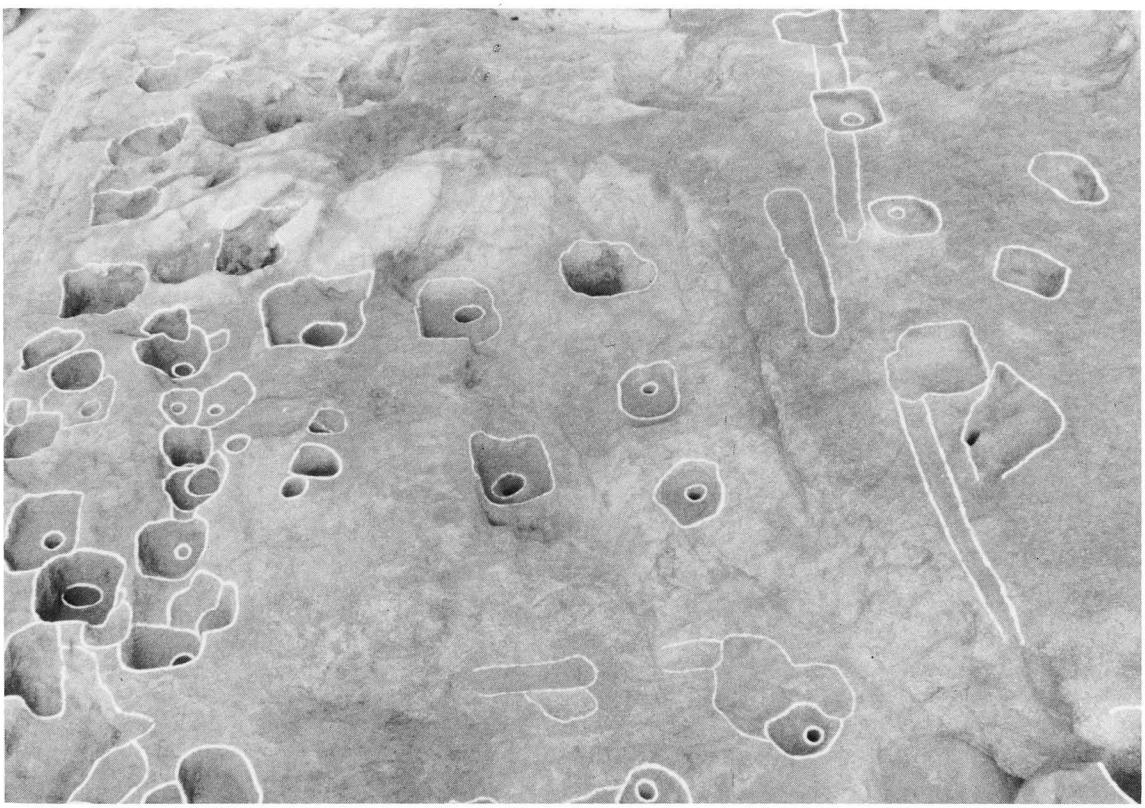
7世紀末葉に廃絶された建物群は、間もなく、土に埋もれてしまう。そして、8世紀前葉頃には、早くも墓地へと変化している。その後、200年近くの間に、4基以上の古墓が築かれた。これらの古墓は、群集するものではなく、数十年間隔で築かれている。古墓の項で検討したように、これらの古墓には、僧侶、おそらくは家原寺の僧侶が埋葬されたのではないだろうか。各古墓の造営年代から考えると、氏族の長、あるいは官人と考えるには、年代が隔たりすぎであり、密集しない状態から、家族墓的性格は見出せないのである。

このように、今回の調査地においては、古墳、建物群、古墓と土地利用が変遷していく過程が判明した。そして、古墳破壊という行為から、6世紀後葉頃に、在地勢力の交替を想定した。この時期における変化は、太平寺・安堂遺跡に留まらず、生駒山地西麓沿いの大県・大県南遺跡をも含むものであったのではないだろうかと考えられる。7世紀に入ると間もなく、この地域に河内六寺と呼称される古代寺院が次々と建立されたことにも関連するのであろう。そして、この変化は、大規模な製鉄工人集団の解体という事実から、在地における変化に留まらず、大きな社会的変化が背景にあると考えられるのである。

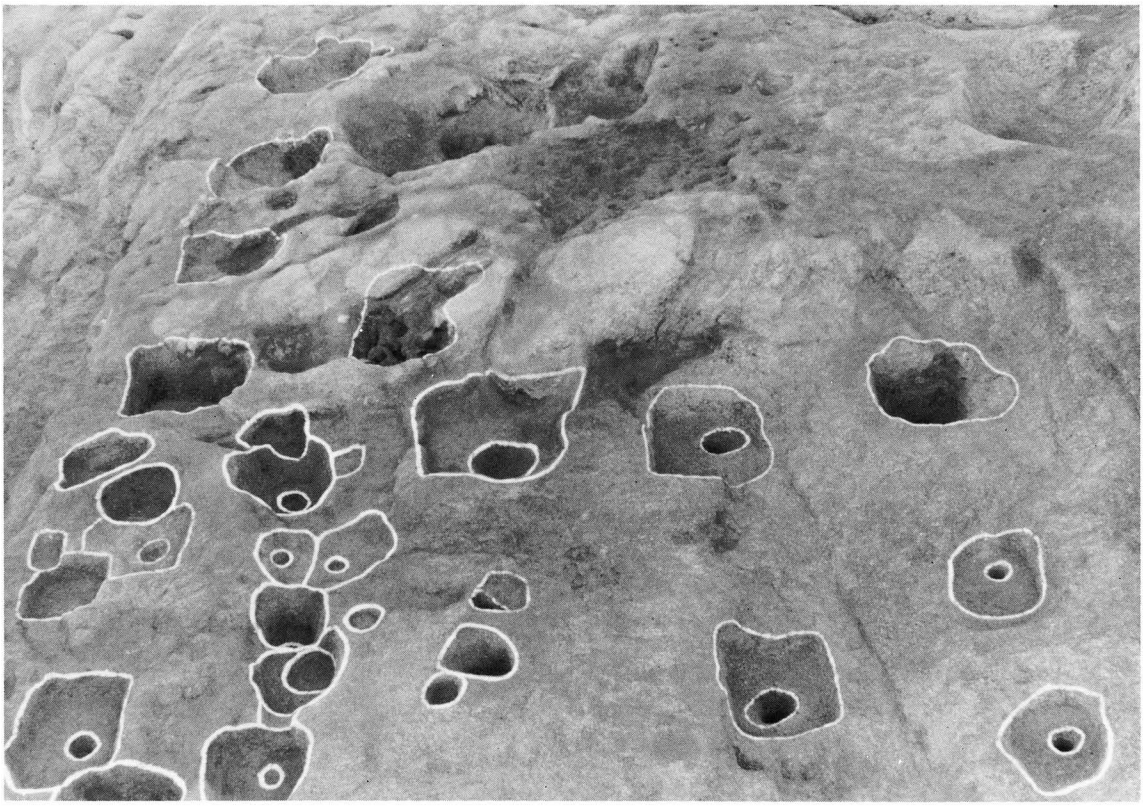
今後、生駒山地西麓における集落の復元、平尾山古墳群の変遷を検討することによって、6世紀から7世紀にかけての柏原市域での変化を追求していきたいと思う。

以上のような貴重な成果がありながらも、体育館という建物の構造上、設計変更は不可能であり、遺跡を保存することができなかった。調査地周辺には、老人ホーム、小学校、中学校、配水池という公共建物が多く、その地形は大きく改変されつつある。一部で古墳等が保存されているものの、その成果は十分とは言えず、残念な限りである。今後も、調査を進める一方で、遺跡を保存すべく努力していかねばならない。

図　　版



Ⅰ区全景

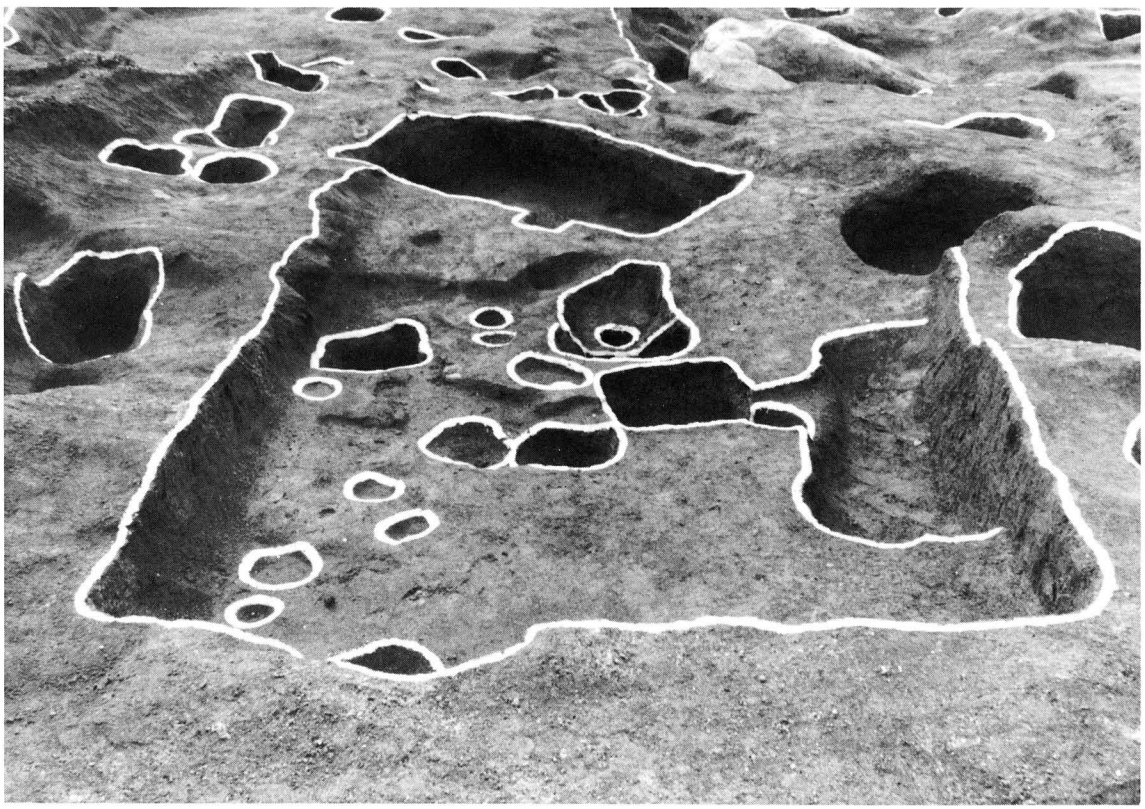


柵―2・建物―2

Ⅱ区全景

Ⅲ区全景

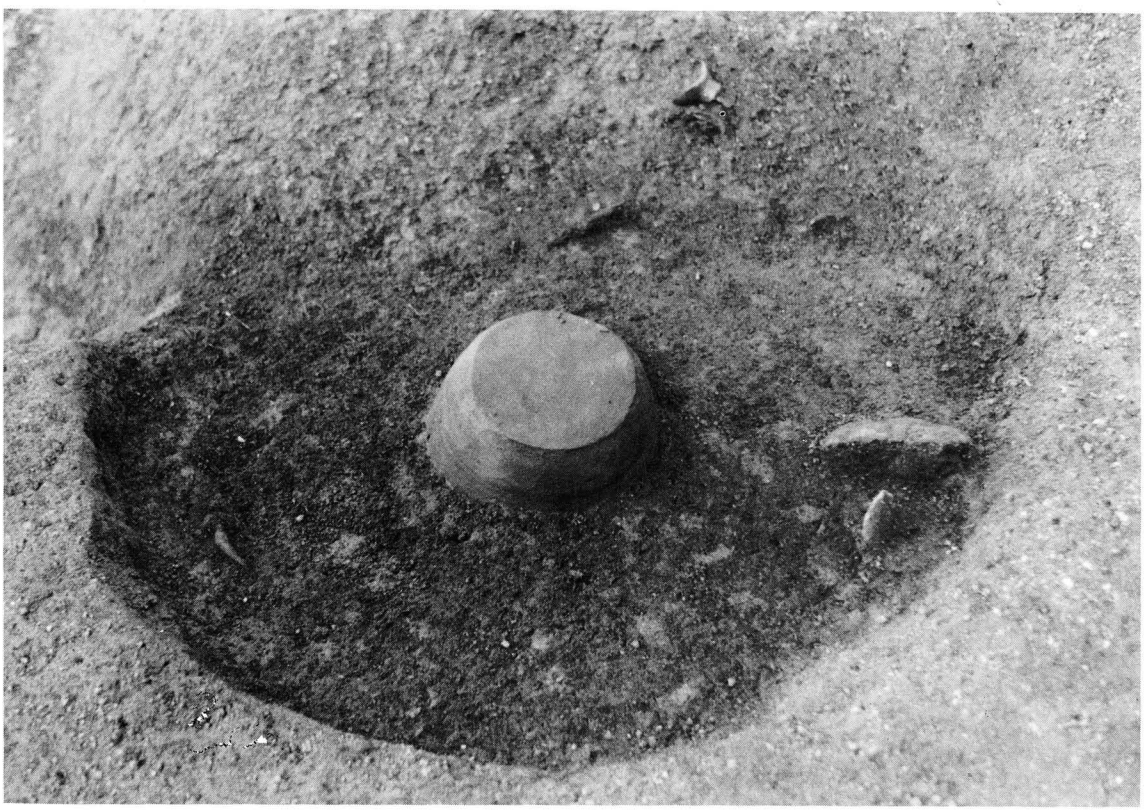
建物―1、土坑―1・2



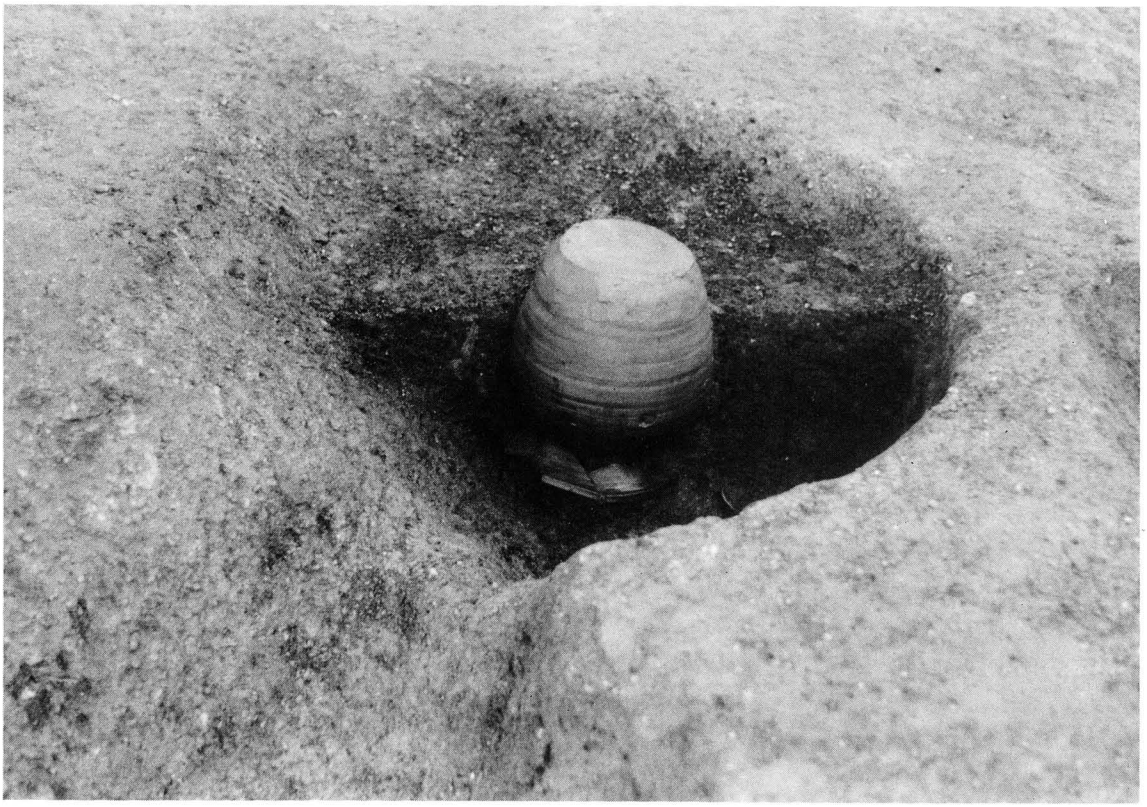
建物―1

埴輪出土状況

掘削後

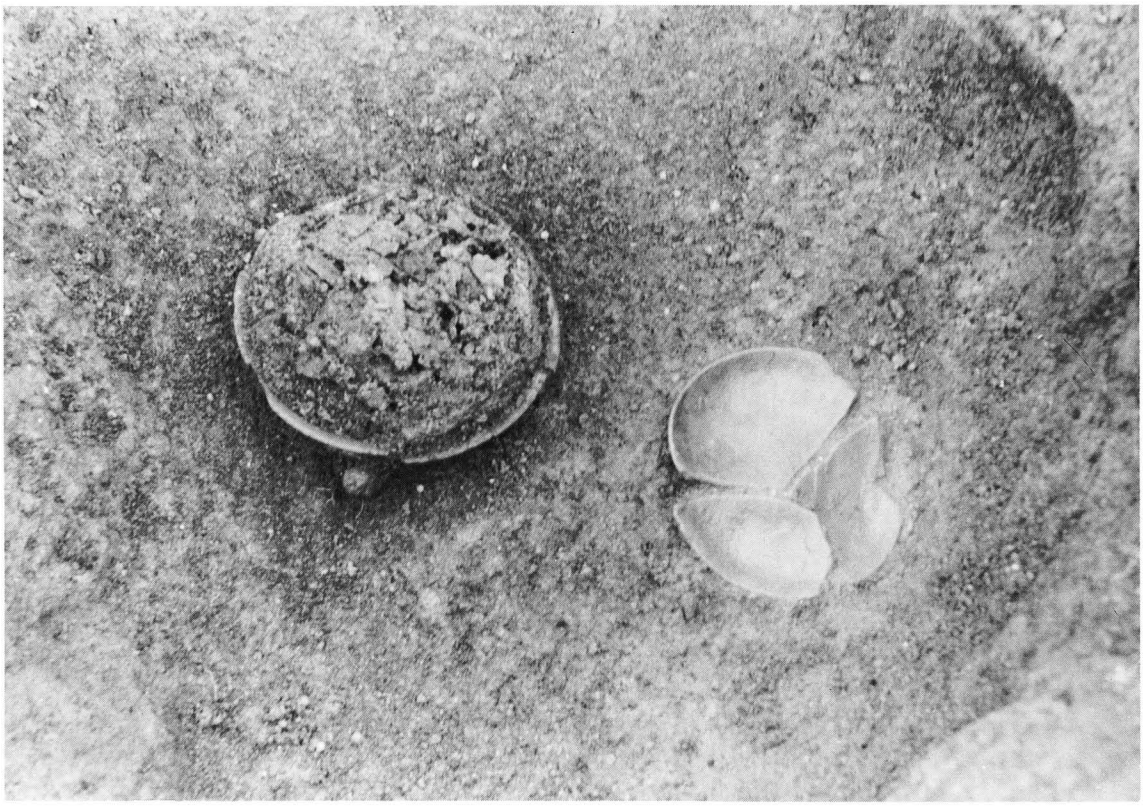


検出状況・土器—1・2

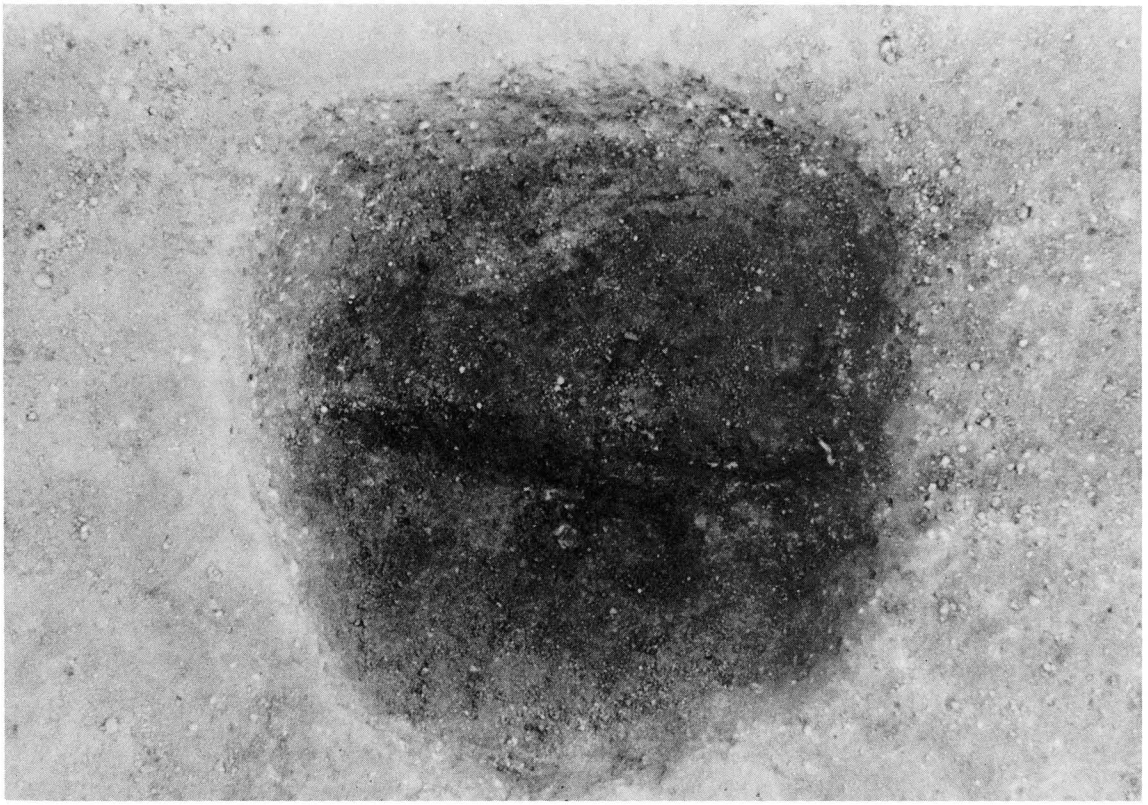


半掘状況

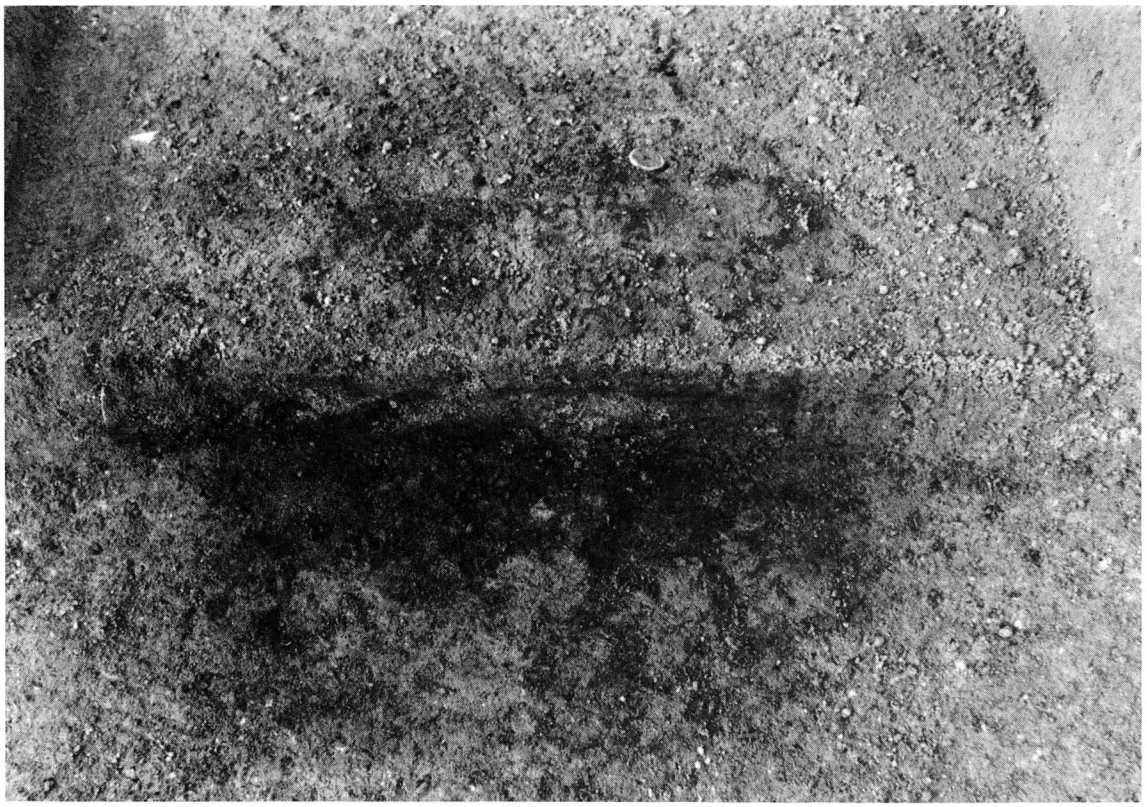
半掘状況



緑釉陶器椀・土器— 3



古墓— 2



古墓— 4

遺物出土状況

掘削後

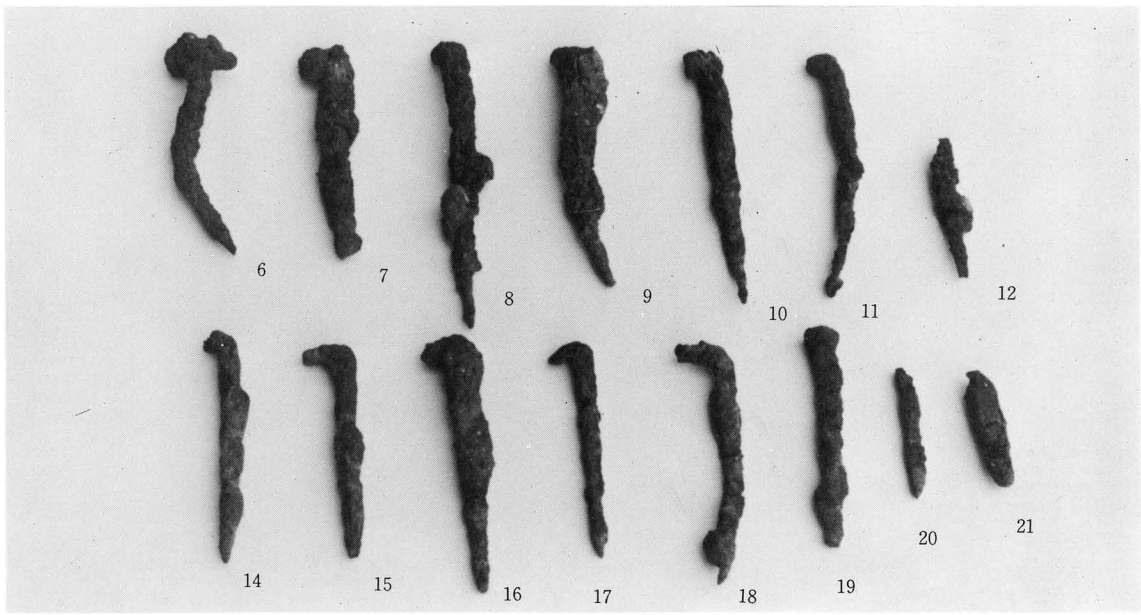
1

2

3

4

5


6

7

8

9

10

11

12

14

15

16

17

18

19

20

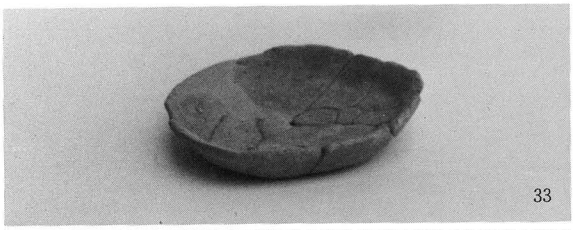
21

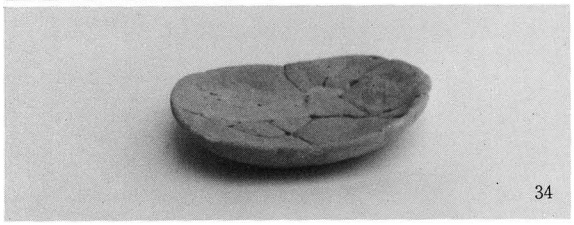
図版10　遺構内出土遺物

ピット—34

26

土坑—1


33


34

土坑—2

35

36

溝—4

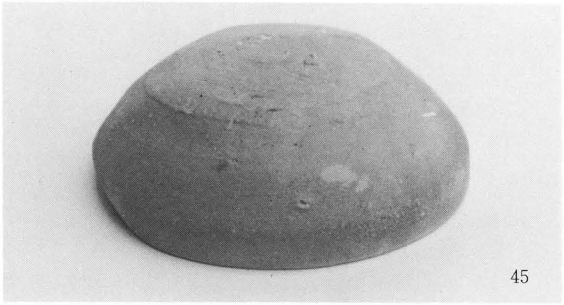
39

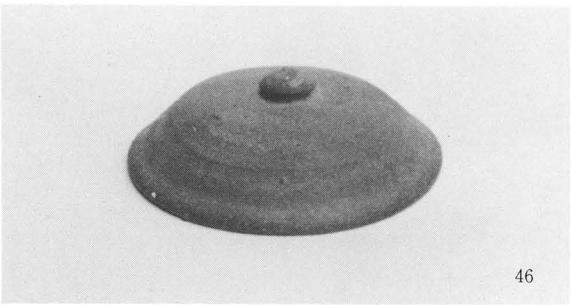
溝—7

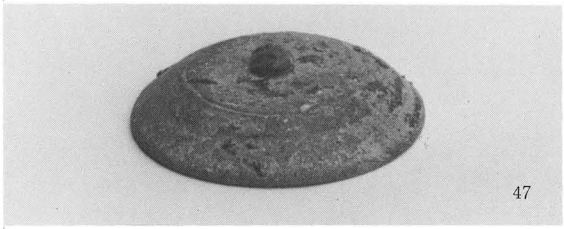
41

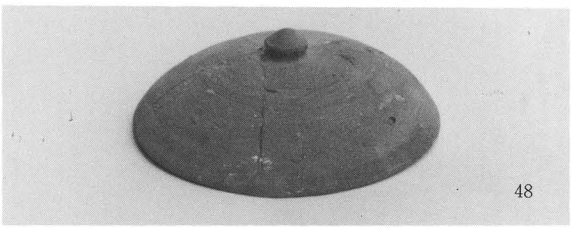
43

44


45


46

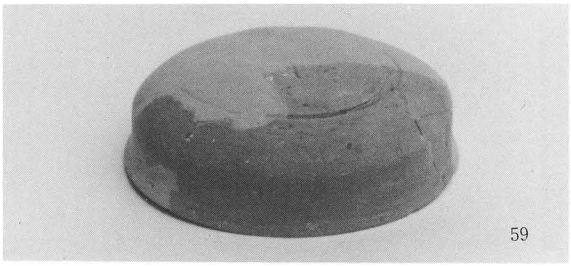

47


48

49

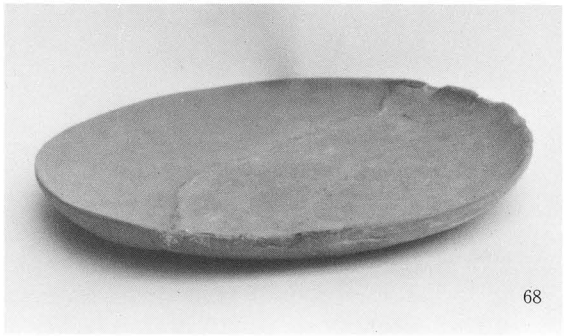
50

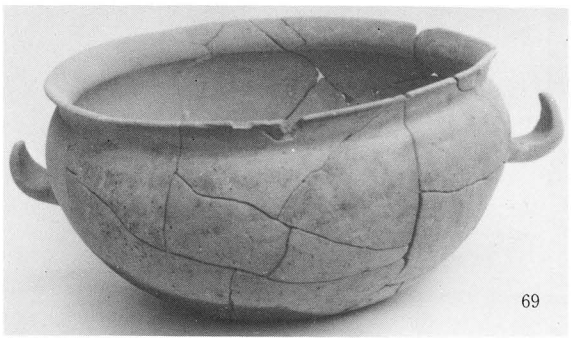
51

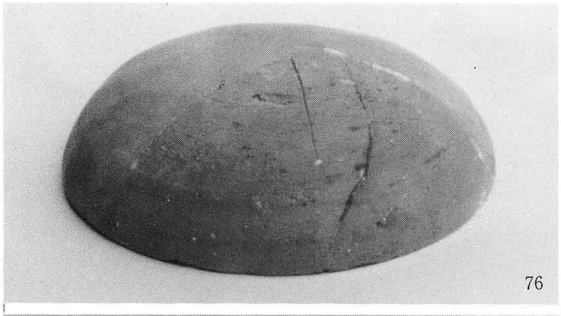

59

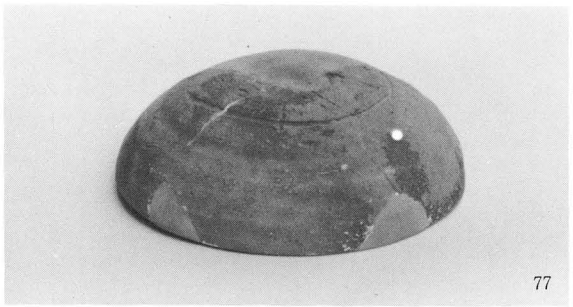
62

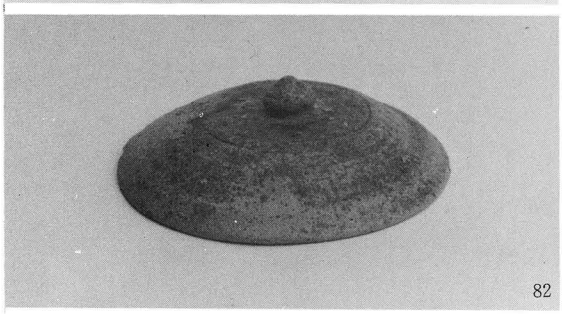
63

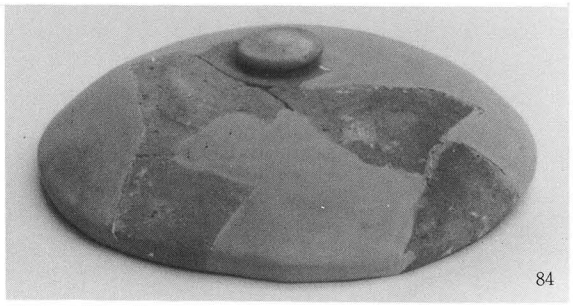

68

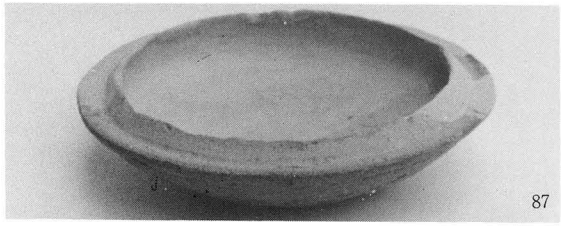

69


76


77


82


84

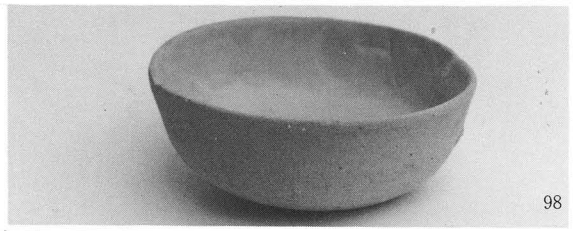

87

88

90

92

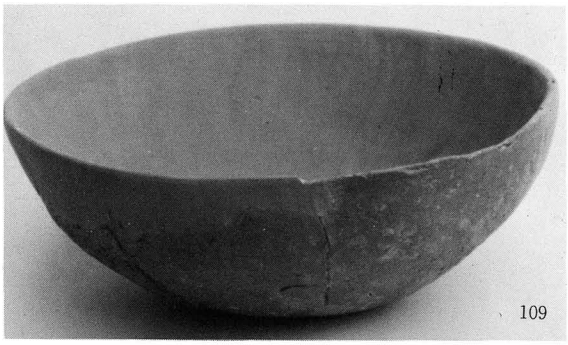
96


98

101

107

108

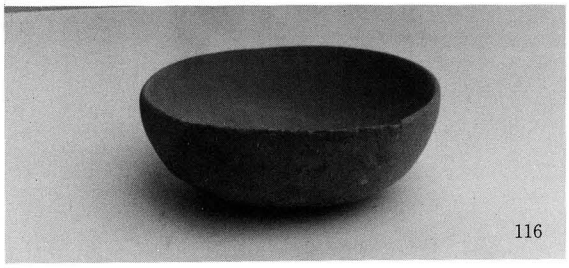

109

112

113

114

115


116

117

118

119

121

128

図版14　包含層出土土器、屋瓦、鉄製品

133

135

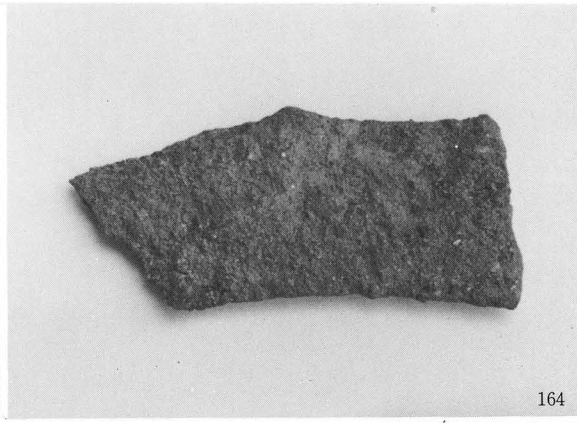
136

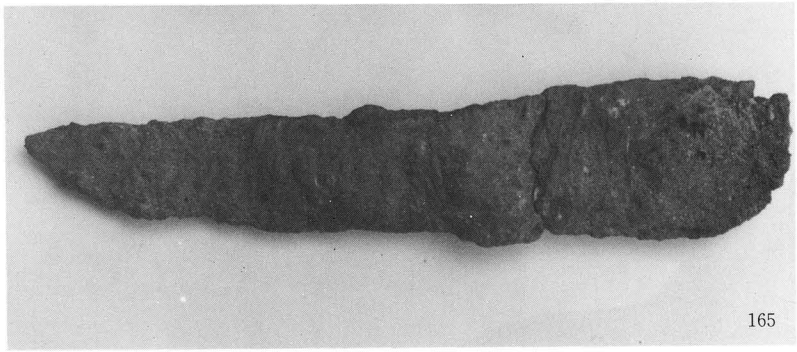
137

Ⅲ区包含層

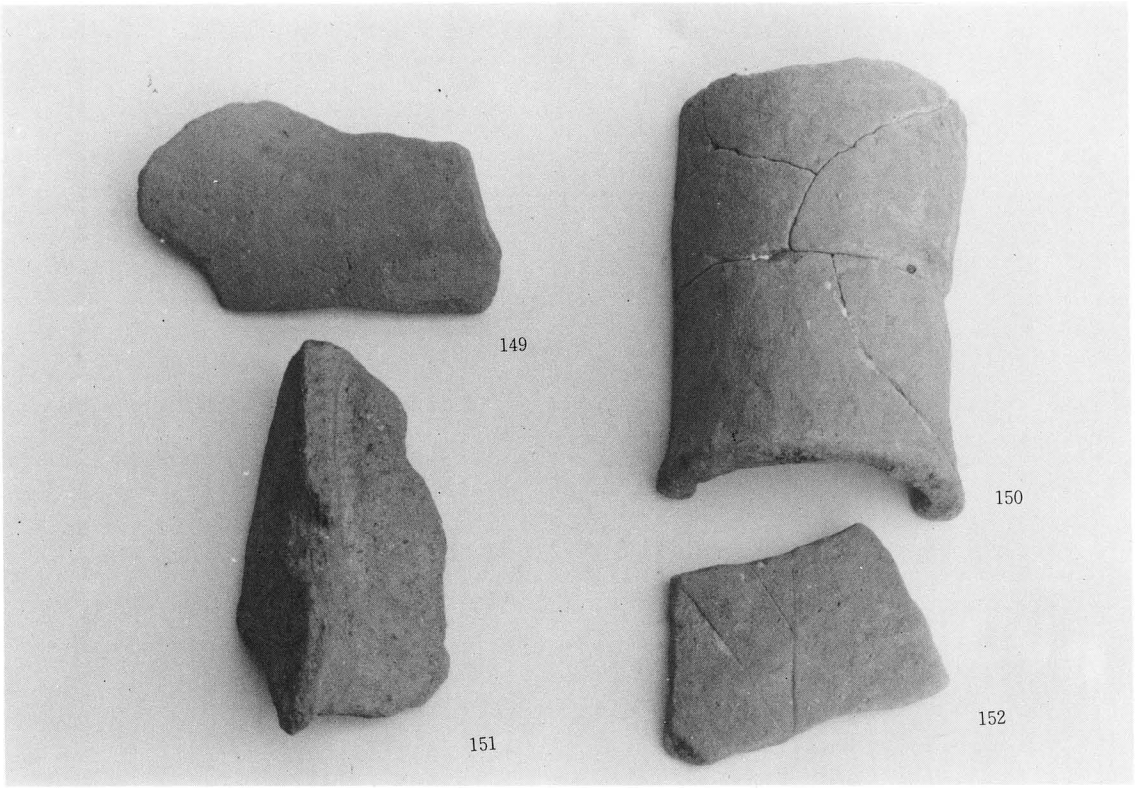
160

屋瓦

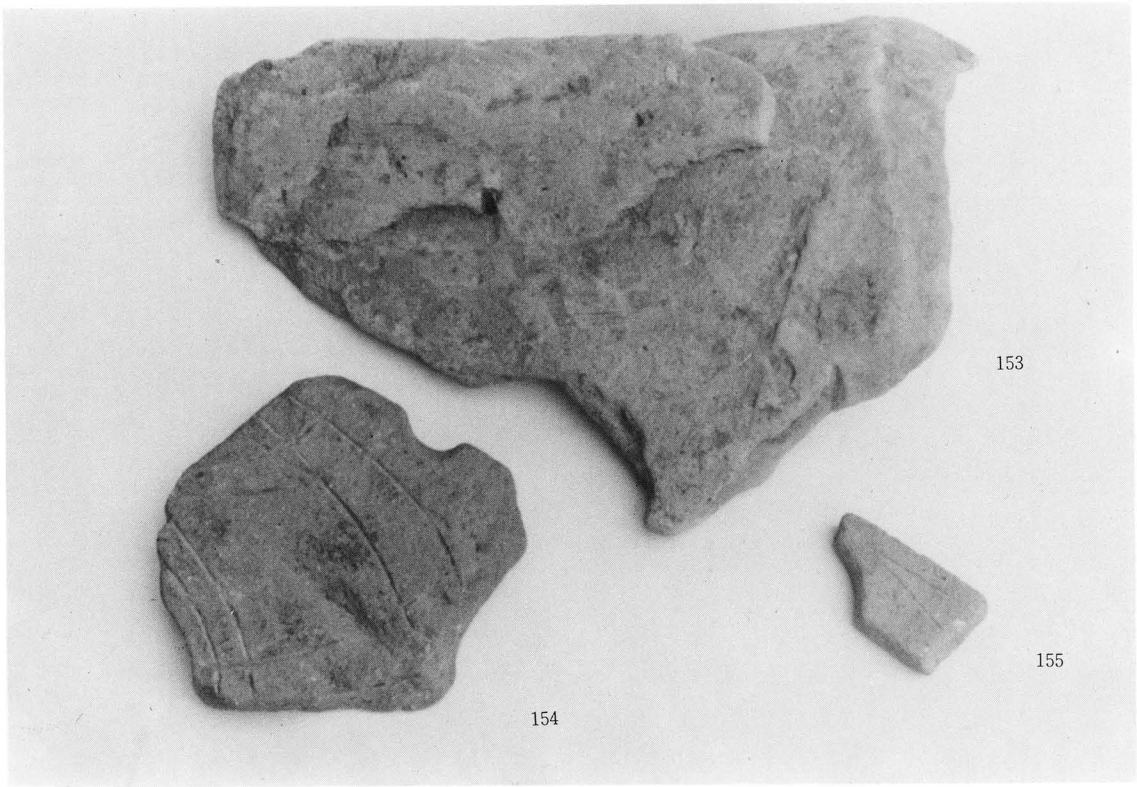

164


165

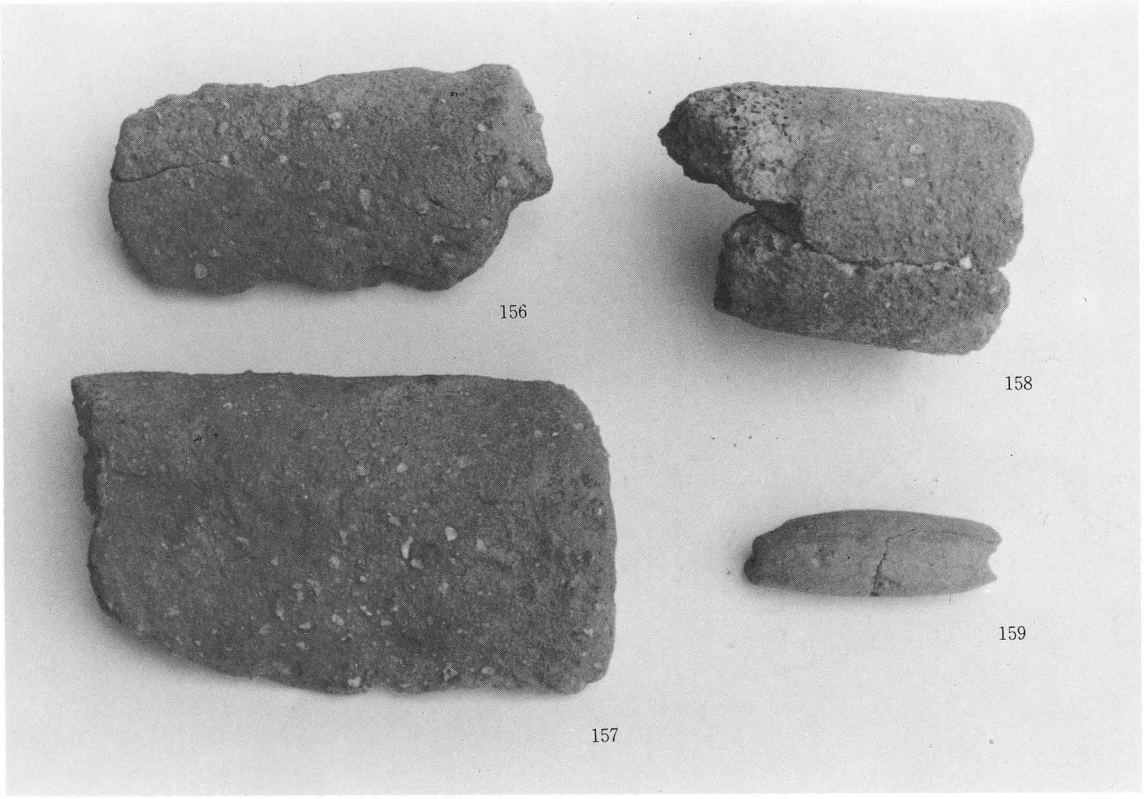
鉄製品



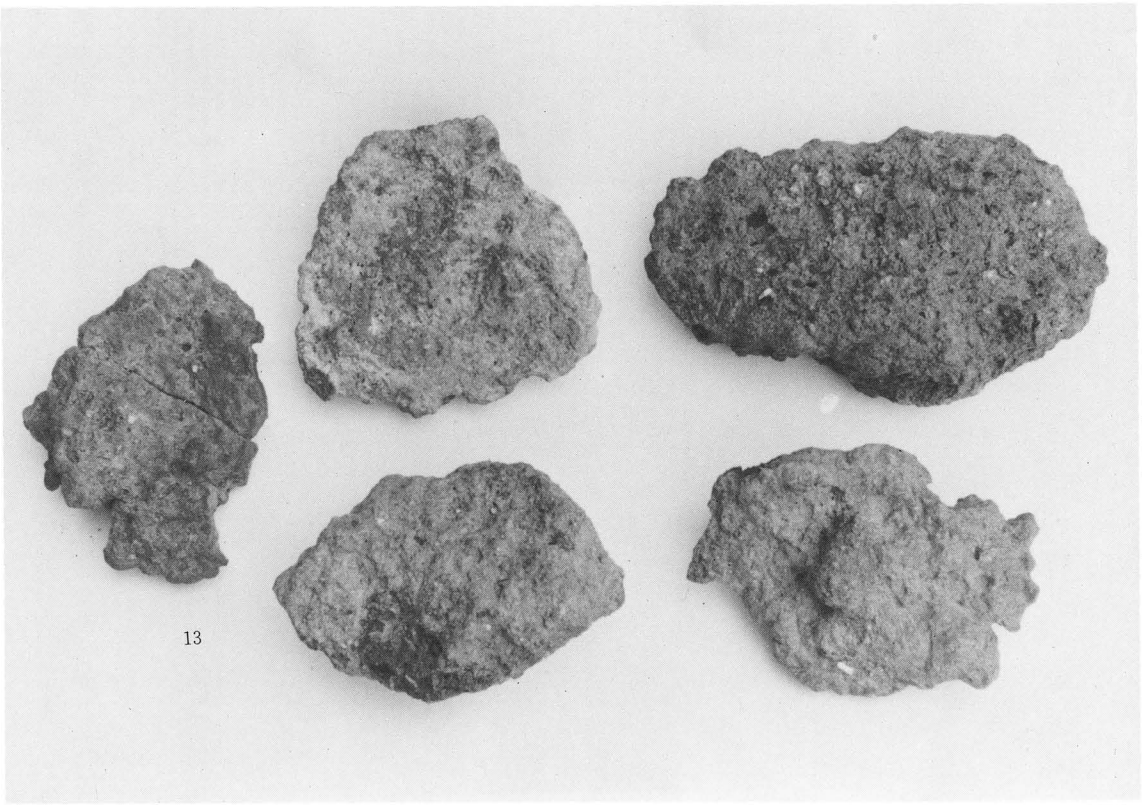
Ⅰ・Ⅱ区包含層



Ⅲ区包含層

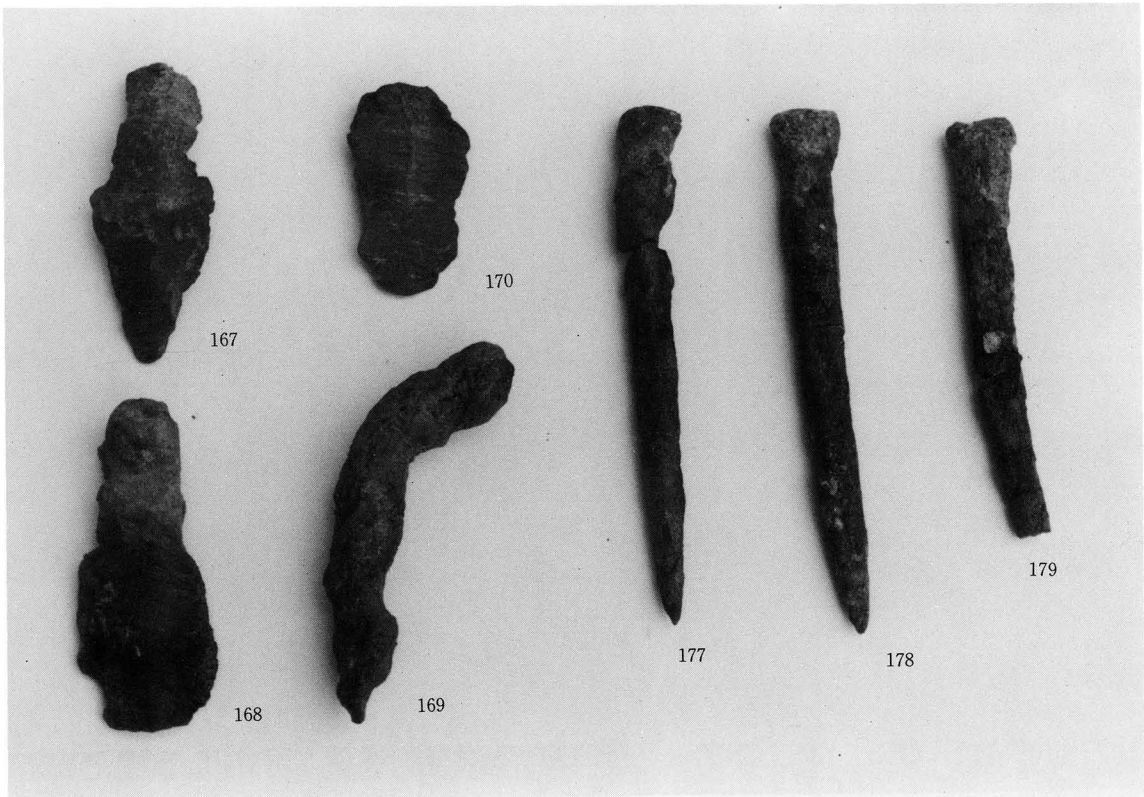


土製品



鉄滓

溝— 4 出土鎹・木棺片



鎹・釘

太平寺・安堂遺跡
1983年度

編集・発行　柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話　0729（72）1501　内線716

発行年月日　1984年

印　　刷　K.K 中島弘文堂印刷所